

帝國新讀本卷十

4a
810
K14

教科
810
41-
2000

41569

教科書文庫

4
810
41-1925
2000
66898

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

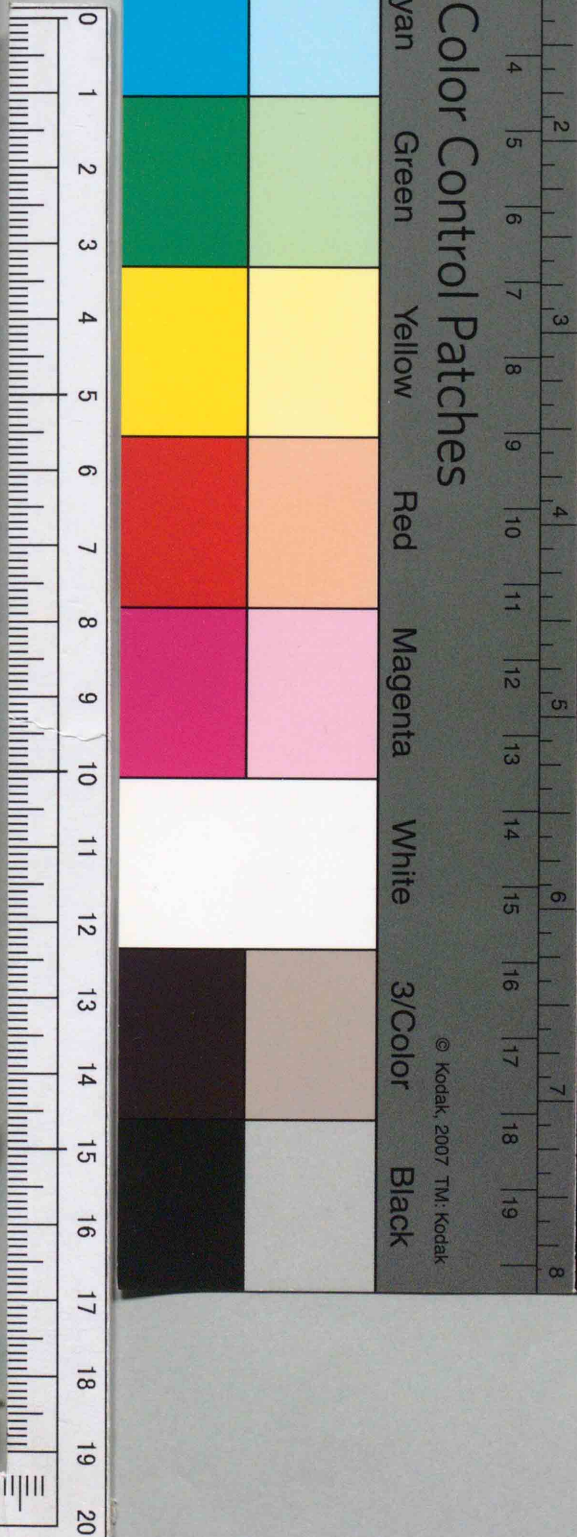


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
810
41-1925
2000066898



雪舟筆

資料室

大正四十二年二月十六日

文部省檢定濟

42
810
大14

文學博士芳賀矢一編

帝國新讀本

東京

合資會社 富山房發兌



広島大学図書

2000066898



帝國新讀本 卷十

目次

一	秋色を觀じて人事に及ぶその一	一
二	秋色を觀じて人事に及ぶその二	七
	自然と人間(自修文)	二三
三	落花の雪	一九
四	寒山拾得	二六
五	大禮勅語	三〇
六	大禮壽詞	三三
	大嘗祭(自修文)	三四

七	秋の川……………	三九
八	百蟲譜……………	四二
九	新島守 その一……………	四五
一〇	新島守 その二……………	五一
一一	室鳩巢へ贈る……………	五七
一二	我が國の繪畫……………	六〇
	佛像彫刻(自修文)……………	六七
一三	石彫獅子の賦……………	七一
一四	詩人杜甫……………	七七
一五	萬葉集の歌……………	八一
一六	古文學に見えた祖先の面影……………	八五

一七	清文寸錦……………	九二
	自然と色彩(自修文)……………	九六
一八	春秋の爭……………	一〇五
一九	花と蝶……………	一一三
二〇	御堂關白……………	一二五
二一	法成寺の造營……………	一二八
	眞善美(自修文)……………	一三三
二二	現代の文學 その一……………	一三七
二三	現代の文學 その二……………	一三四

俳句百吟

目次終

帝國新讀本卷十

一 秋色を觀じて人事に及ぶその一

三宅雪嶺

春花の爛漫たるは妍にして艶、秋葉の霜に飽きて丹化するも亦
 稍相似、その優劣を談ずる、古よりこれあり。天智帝の春山萬花の艶
 々、秋山千葉の彩々、いづれか優れると宣へるに、(一)額田女王應へて、
(二)ふゆごもり、はるさりくれば、なかざりし、こりもきなきぬ、さか
 ざりし、はなもさけれど、やまをしみ、いりてもこらず。くさふか
 み、たをりてもみず。あきやまの、このはをみては、もみぢをば、こ
 りてぞしぬぶ。あをきをば、おきてぞなげく。そこしおもしろし、
 あきやまわれは。

(一)天武天皇の妃、
(二)萬葉集卷一、
 はるさりくる

枝條に點綴す

霜葉の二月の花に優るを陳べにき。しかも女王の擇びしところは、他の必ずしも肯ぜざるころ。人各判断を異にし、決着に到らんこと難し。今は姑く言はじ。但し春を觀るに寒風樹を吹くの時、梅花まづ蕾を破りて、清香衣袖に溢れ、これに續きて桃、續きて櫻、海棠、然る後萬花妍を競ひ、紅紫山野に滿つ。花に嫩葉の緑を添ふるあり、添へざるあるも、皆枝條に點綴し、瓣の軟風に吹かれて繽紛飄落するは、眞に優にして、裏なるを示すもの。稱して美とせんか、春は即ち艶麗とすべし。

宇宙朗曠

更に秋を觀るに、秋碧空に浮かびて、宇宙朗曠、滿目たゞ濃黄と爲り、渥丹と化し、黄なるは黄金を敷き、丹なるは錦襪を張り、壑に懸り、溪に亘りて、錦障を聯ぬるの狀を現す。色彩を以てすれば、遙かに春花に優るとすべく、而して丹朱爛然として野火の烘ゆるが如きは、寧ろ甚だしきに過ぐ。同じく稱して美とせんか、秋は即ち宏壯とすべし。

べし。

(一)宋の人。字は永叔。唐宋八大家の一。

慘澹慄烈

(二)「おくればば梅も櫻におこるらん、魁けてこそ色も香もあれ。」殉難義録稿、河上正繡を纂め錦を綴る。

秋の景色は實に天高く、氣清み、草木齊しく色を變じ、野に、山に、燦爛として光彩眼を奪ふ。しかもその極るの時は、正にこれ樹葉飄零して、寂寥の觀を呈するの時、歐陽修が秋聲賦に、「初淅瀝以蕭颯、忽奔騰而砰湃、如波濤夜驚、風雨驟至、其觸於物也、鏦鏦錚錚、金鐵皆鳴、又如赴敵之兵、銜枚疾走、不聞號令、但聞人馬行聲。」その秋聲とは即ち凋稿せる樹葉の、互に接觸し、若しくは飄零して窓を撲ち、地に墜つるを指せるもの。その一望丹黄華麗を盡せるところは、かくして搖落し、慘澹慄烈たらんとす。

古來人の春花を引ききて譬喩するもの多し。梅花の寒を凌ぎ、雪を冒し、玉肌芳香を放ちて而して散去る。いはゆる魁けてこそ色も香もあれといふの類なり。されど秋葉の丹化し、繡を纂め、錦を綴り、瓌璨として目を眩まし、然る後飄零して舉げて一空に歸するも、亦頗

る見るべからずとせず。これを人事に喩ふる、少壯事を起し、險を冒し、一敗して命を殞す。悲惨悽愴人をして哀を催さしむるも、年すでに老い、經歷あり、功勞ある身にして、なほ發憤事を擧げ、運命に安んじて、從容生を授くるは、他の感を惹くの一層深きことあり。敦盛の一ノ谷に陣歿せる、今に及びてなほ人の説くところ。須磨の邊に種の遺物あり。或は敦盛蕎麥などいふもあり。遺物の偽造なるは言ふまでもなければ、附近の地に名勝古蹟の人言に上る、能くこれが右に出づるあらず。しかもこれたゞ事情の哀なるがためにして、宛も春花の早く香を放ち、軟風に飄落すると同じ。齋藤實盛齡七十、鬢髮を黒くして戰場に臨み、軍利あらずして餘衆皆退散せるに、乃ち單身留り戦ひ、我が頭を斬り木曾公に獻ぜよ。と呼ばはりて死したる如き、はた又三浦義明の九十に垂んとして、頼朝の擧兵を援け、戦敗れて頼朝の死を聞き、その子に語りていふ、公は一敗を以て死す

搖落す

る者ならず、汝等必ず索めて隨へ。我は年老いて行く能はず、留りてここに死せん。と、遂に命を敵刃に殞ししが如き、一種限りなき悽愴の感を人に與ふ。年老いてその終を潔くするは、普通の事情の哀を催さしむるに違ひ、秋葉の爛然として萬丈の錦を織り、而して秋風に搖落するの形あり。

驕倨放肆

禽鳥の死に臨みて美音を發するあると同じく、人も亦老後に奮躍して死を妙にするあり。清盛の位人臣を極め、驕倨放肆、憚ることなきや、誰とてこれを憎く感ぜざるはなきも、その病みて將に死せんとし、吾死するの後は必ず佛に供へ經を唱ふること勿れ。たゞ願はくは頼朝の頭を斬りて墓前に懸けよ。といへる、幾分の同情を惹くに足るなり。頼朝は業遂げ、志成り、手に兵馬の權を握りて永久の基を立てしかば、臨終の際に特に見るべきなく、或は兇手に斃れたり。とさへ傳へらる。彼資性善く忍び、喜怒色に現れず、深く謀り遠く

耳順
鵬搏萬里

慎計密謀
危道を踏む

慮り、坐ながら天下を制御するに至れる、以て器度の一世に超卓せしを見るに足るも、天真を發露して人心に愉快を感じしむるに至りては、却つてこれを清盛に看ること多し。秀吉すでに天下を一統し、齡亦耳順に及び、乃ち鵬搏萬里、師を朝鮮に出し、進みて明に入らんとし、陣營に勞する約七年。前には必勝の算を立て一々皆中りしに、ここに於て計るところ數、齟齬し、竟に何の得るところなくして終りたるが、その豪邁雄略、人心を發動するの大なるは、即ちここに存す。これ亦終を壯にせるものと謂はざるべからず。家康は慎計密謀、いはゆる子規に對し鳴くまで待たんせしもの。勝利を萬一期し、敢へて危道を踏むが如きことなく、隨ひて大慘事なく、大快事なきも、上杉氏東に起りて檄を傳ふる、直ちに赴きてこれを伐ち、而して石田等以て計策の中れりとし、虚に乗じて大軍を西に集むるや、遽に軍を旋して關ヶ原に會戦し、親ら馬を躍らして、諸軍を指揮

安を貪らず

したるは、戰略の見るに足るなきにせよ、意氣の頗る壯なるを見るべし。後十餘年を経て、歳すでに七十を超え、會、大阪の役あり。前後二役ごもに大軍を督してこれに臨み、遂に覇業を定めたる、老いて益壯にして、徒に安を貪らざるを知るべく、その行爲の人に愉快を覺えしめざるに拘らず、なほ當時に傑出したるの疑はれざる所以なり。

二 秋色を觀じて人事に及ぶ その二

西郷隆盛功成り名遂げて故山に歸臥し、然る後壯丁を提げて三太郎を越え、九州を震動せしめしが、此の如きは理の見るべきなく、若し養成せし健兒の、すでに事を發して復制する能はず、己獨り生くべからずとしてこれに一命を授けたりとする、餘りに力なきに過ぎたり。將力能くこれを制するに堪へしも、實に自らこれを率ゐ

歸臥す
肥後葦北郡
肥後より薩摩
に入る國道に
當る三箇の峠
津奈木太郎赤
佐敷太郎赤
松太郎をいふ

(一)日向國白杵郡

非命に死す

策士

て政府を覆し、以て大いに志を逞しくせんとする、即ち餘りに無謀に過ぎたり。いづれより見るも稱するに足らずと雖も、しかも老西郷の一生は、即ちこの戦争を以て、更に一段の生氣を添ふるあり。その可愛の嶽に籠守し、四面遁るゝに地なかりし時、部下數百を將ゐて奮闘圍を脱し、故山に還り笑を含みて死したる、殆ど終を詩的にせるなり。何の爲に起りて、何の爲に戦ひたるか、意志判然たらざれども、その判然たらざるどころ、却りて豪傑の豪傑たるどころを表す。若し彼をして非命に死するなく、徐に天命を終へしめたらんには、位は元勳の首座を占め、聲望當代に並びなかりしならんも、そのいづれが生涯を豪壯ならしめたるかは言はずして知らる。

孔明年二十七、出でて三分の計を畫し、奇策縦横、謀るところ成り、成るところ功ありしが、しかも皆策士流の事、當時策に於てこれに匹儔すべきものその人に乏しからず。而して多く稱するに足らず。

成敗利鈍

(1)Oron.
外蒙古、黒龍江の上流、朽ちたるを推き枯れたるを拉ぐ

(二)甘肅省。
(三)阿骨打の滿洲に立てた王國、十世百二十年間。
(四)陝西省、華陰縣の東。
(五)今の河南省開封府。

たゞそれ窮時に方りて顧託を受け、遺孤を擁して艱險に當る。誠意忠節、少しも權を挟み私を營むの跡なく、成敗利鈍逆め料り難く、鞠躬盡力死して後已まんを期し、出でては將、入りては相、病を力めて大事を處し、終に陣中に終りしが、群雄の中に特出し、人臣たる者の儀表と爲れる實にここに於てし、彼はこれを以て殆ど聖の域に到り、三代荒唐の時代と雖も、能く及ぶ鮮し。成吉思汗、斡難、河畔に起りて四方を經略し、雄師向かふところ朽ちたるを摧き、枯れたるを拉ぐが如く、西亞を蕩定して東歐を侵占す。然るもその累りに領土を拓けるは、宛も蠻酋の暴力を振ひて止るを知らざるの觀あれど、還りて六盤山に到り、病みて死せんとする、左右に語りていふ、金の精兵潼關に在り、南は連山に據り、北は大河を限る。以て遽に破り難し。道を宋に假るに如くは莫し。宋と金とは世讐、必ず能く我に許さん。乃ち兵を唐鄧に下し、直ちに汴京を撞け、汴急ならば必ず兵を潼關

(1) Chatham. 英國の政治家、少ビットの父なる老ビット、チャタム伯と稱する。(西曆一七七八年)

誅求

(2) Richmond.

(3) Bourbons.

當時の佛國王

Philip

Sidney.

英國の貴族、文武に通じた。

代に才名あつた。(西曆一五五

八六年)

に徴さん。然して數萬の衆を以て千里赴き援はば、人馬疲弊し、到る
と雖も戦ふ能はず。これを破らんこと必せり。と。その敵を料り、勢を
察する、實に掌を指すが如く、眞に智略の遠く人に超えたるを見る。
チャタムは一代の偉績、英國の威名をして隆々世界の表に耀揚
せしめ、世に第一流の政治家を以て目せらる。しかもその大なるの
感ぜらるゝはここに在らず。すでに官を罷めて後、英政府の米洲植
民地に苛政を施きて誅求到らざるなきを攻撃し、以て双者の間を
善くするに努め、而して一旦米の佛と勢を聯ねて逆ひ抗し、而して
リッチモンドが戦争を不利として講和を主張するに及び、翻然前
説を棄て、病を扶けて議院に臨み絶叫すらく、ブルボンの前には決
して膝を屈すべからず。飽くまで戦争を繼續して、最後の勝を占め
ざるべからず。と、氣昂り、胸塞がり、その場に卒倒し、昇がれて家に歸
り、終に瞑したる、これ誠に七十年の生涯を振はしむるに足れり。フ

(4) Elizabeth. 英國の女皇。
(在位西曆一
五五八年—一
六〇三年)

イリップ・シドニーは、⁽¹⁾エリザベス女王の眷顧を被り、名を當代に騁
せにき。しかも後人の感歎して措かざるは、特にその臨終の光輝を
放てるに於てす。英軍に將としてオランダを援けスペインと戦ふ
や、飛丸に腿を貫かれて倒れ、流血淋漓、渴を覺ゆる頻りなり。従者百
方搜索して僅かに一杯の水を得、捧げてその前に至る。傍に一兵卒
の傷つき倒るゝあり、氣息奄々、従者の盃を捧ぐるを凝視して、心に
大いに羨むもの如し。シドニー盃を口にせんとして偶、これを看
乃ちいふ、彼のこれを要する、吾よりも多からん。と。盃を垂死の傷兵
に與へたり。これ後人の、今に及びてなほ嘖々として稱するところ。
若し彼が最期に於てこの事なかりしならんには、シドニーの名は、
或は遺れられたるやも知るべからず。しかも年壯なるシドニーの
光輝ある最期や、寧ろ爛漫たる春花の風に散るゝ状を一にし、麗は
則ちこれあるも、未だ壯とすべきに至らず。これに反し、前に列記せ

犬豚と擇ぶなし

掉尾の飛躍

る數者の齡傾きてなほ志せるところに淬勵奔勞し、斃れて而して後に己みしは、以て麗とすべからずと雖も、壯は則ち餘りあり。人の世に處する、事を遂げ、功を奏せる者何ぞ限らん。身を顯榮の地に陞しし者、亦甚だ多し。然るもしかして後十年、二十年、若しくは三十年の餘命を保ちながら、却つて一事の成るなく、一功の擧るなく、たゞ碌々無爲、食ひて臥し、覺めて食ふこと、犬豚と擇ぶなく、爲に前年の功績を遺れられ、甚だしきは死生の分明ならざるあり。彰著の功を樹てて、幾何ならざるに世を捐つるか、然らずんば老に及びて、掉尾の飛躍を演ずるか、いづれかその一に出づるに非ずば、以て英雄の面目を完うし、盛名を久しきに傳ふる能はず。即ち春の景色となるか、秋の景色となるか、必ず花々しき最期を遂げ、以て一生を艷麗若しくは宏壯ならしむるを要すべし。但し秋に入りて草木多く色を變じ、光彩燦爛一時の壯觀を盡し、然る後飄零凋殘し去るこ

はいへ、これ等多くの草木を外にして、更に松柏の凋むに後るゝあり。固より萬木悉く然りとし、一を以てすべてを律すべきにあらず。彼の松柏の屬、四時を貫きて緑を變へず、目を眩するの紅彩、人を悦ばすの麗色を缺き、一歳の間特に觀て賞美するの時なしと雖も、その蒼幹數十丈、亭々として空を凌ぎ、天に參り、枝條は四方に張りて蓋の如く、蒼鬱として烟霧を罩め、隆冬を經、霜雪を冒し、長へに青を更めざる、實に變化の外に出づるものと謂ふべし。これあるか、これあるか。これ亦察せずんばあるべからず。

— 想 痕 —

自然と人間 [自修文]

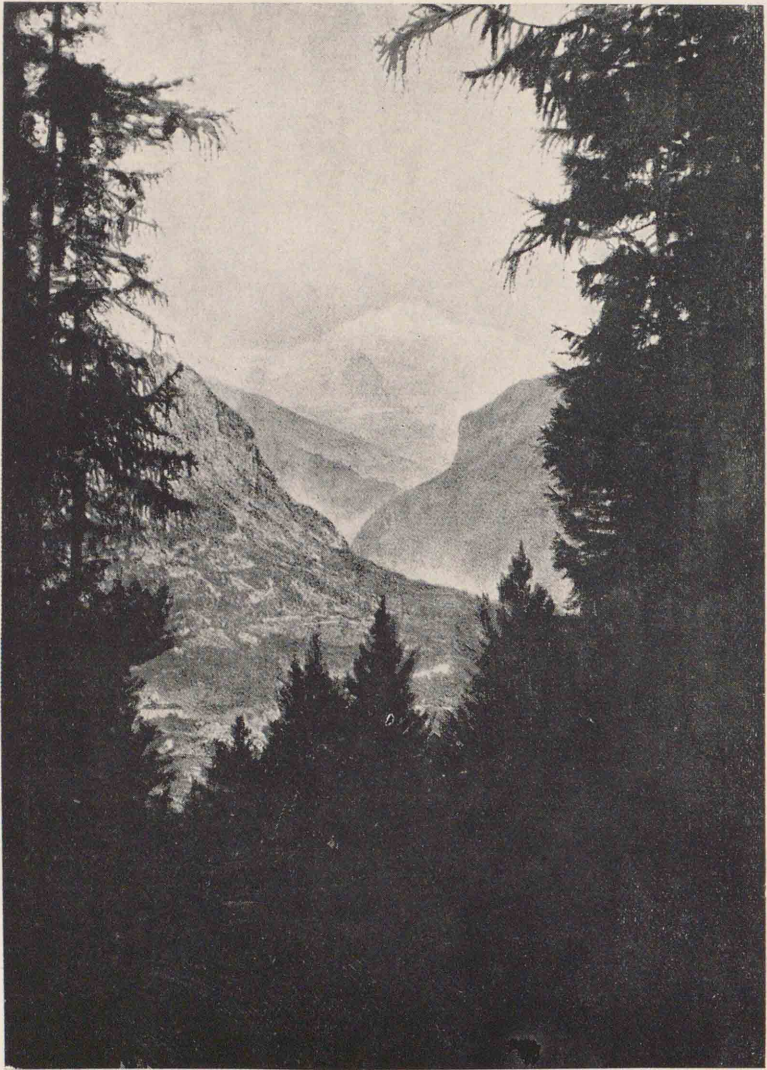
成瀬 無極

「私はいつも世界を自分より偉大な天才者と考へた。」とゲーテはいつた。「自然」すら背き去る文化は危い。自然は儼存してゐる。外國に旅して私はそれを感じた。自然と人間の交渉といふ事を考へて見たい。

(一)文學士、名は清、京都帝國大學助教授

歸朝の途次我々の船はシンガポールに着いた。一步を陸上に踏入れて、私は驚異の眼を見はつた。私に取つて全然未知の世界が展開せられた。往航は灰色の太平洋の波浪を凌いで行つた。侘しい冬の旅であつた。今度は一ヶ月餘の間に殆ど四季を経過した。そしてここは常夏の國である。強烈な太陽の光を浴びて、すべてがまばゆく輝いてゐる。土のいきれと草木の香が劇しく鼻を撲つ。どこまでもどこまでも椰子の樹が生茂り、廣大な護謨林が續く。黒い皮膚をした土人の男女と、黄ばみ萎んだやうな支那人との間に、鶏や犬や豚の仔などがうよ／＼歩いてゐる。飽きるほど見慣れた西洋婦人の白衣の姿などが却つて珍しい。長雨の後でもあつたらう、所々出水して、熱帯の草木が濁つた水溜りの中へ枝を垂れ葉を浸し、小さな流に想ひがけず巨大な帆船が入つてゐたりした。十二月だといふのに、オフィスでは皆ワイシャツ一枚になつて、額に汗しながら事務を執つてゐる。頭上を扇風機がせはしなく廻つてゐる。私たちは湯上りの浴衣で、氷を添へた刺身を食べた。一年中單衣で通すといふ不思議な土地である。季候に變化がないから、却つて「時」が早く經つやうに思ふといふ。十

Office.
事務室。



ウラフダシユ

(1) Spectrum.
七色の景色。

(2) Penguin.

(3) Jakob

Wassermann

のオーストリア
の小説家。(西
曆一八七三年

(4) Temperament

性質。氣質。

(5) Temper.

氣性。

(6) Temperature

氣候。

二月から正月にかけてが、最好の季節と聞いた。然るに一方にはこれと正反對に、常冬の國もあるのである。不幸にして私はさういふ國に行つて見る機會がなかつたが、想像して見ることは出来る。「紅い、顫へる圓板に似た太陽が、顫へる水平線に觸れるやうな時が來た。海の浪は動いてゐるまゝで氷結し、亂雜に積重ねた紫色の布のやうに見えた。我々の背後の雪の野原は、何億萬の氷の結晶に輝くスペクトラムとなつた。空中に高く珍しい虹色の雲が燃えてゐた。海豹、ペンギン鳥は姿を隠し、我々は骨の髓まで凍えながら小舎の前に立つて、太陽の最後の光の輪が消えるまで——同時にすべての生活が終るまで待つてゐた。これはワッツサーマンの小品「極光」の中に見える極地方の描寫である。單に季節といふものを取つて考へて見ても、「常夏の國」と「常冬の國」の間に於て、その住民のテンペラメントに著しい相違がなくてはならない。テンパー又はテンペラチュワーといふ言葉に依つても、又「氣象」といふ文字に依つても、自然と人間の交渉の密接なことがわかる。

歐洲、殊に中歐は概して春秋が短く、冬から直ちに夏に變る。ベルリンの氣

候はほゞ我が北海道のそれに該當するといふ。ロンドンの最好季節も、春といふより寧ろ初夏であらう。四季の微妙な推移を味はふ點に於て、日本は最も恵まれた國の一つといへよう。これ等の點がいかに國民性に影響して行くか。諸國に旅をして私は常にこの事を考へた。

或點で自然の形象が似てゐるらしいスペインと北歐諸國の間に、南と北が形づくるとコントラストはごんなものであらう。イタリーのナポリ邊の氣分、カプリ島からソレントあたりの風光に親しむと、凡そこれ等南國の類唐の氣象が、ごういふ風に伊國人の氣質を醸成して來たかご考へさせられる。「甘き無爲」ごいふ心地は、スペイン、南佛あたりにもあらう。少くも私はナポリごブダペストに於て、その住民の氣質の上に幾多の類似點を見出した。「彼等は熱情的である。又藝術的天分に豊である。音樂に舞踏に秀でてゐる。しかし根のない焔である。國民としては亡國の民である。」ご自國人を評したブダペスト生まれのG夫人の言葉を思ひ出す。

(1) Contrast. 對照.
(2) Napoli. ナポリ.
(3) Sorrento. ソレント.
類唐
おそろへるごこと.
(4) Budapest. ハンガリーの首府.

影響を及すに違ない。

昨夏スキスのインタラーケンに遊んで、「ハイムウエー・フルウ」ごいふ丘に登つて見た。「郷愁が岡」ごでも譯すべきであらう。この「郷愁」ごいふ名が、私の興味を引いたのである。ケーブルカーを一人で占領して頂上へ着いた。曇り日なので、餘り遊覽の客もなかつた。非常に美しい眺望で、ユング・フラウが雪を戴いた清楚な姿を現し、一方にインタラーケンの市街を俯瞰し、靜かな湖水を圍んで、緑の山が深い巒を疊んで、ゆつたりと立並んでゐる。「郷愁」ごいふ名の由來に就いては、案内記にも記してなく、茶店の婆さんや、繪葉書を賣る娘も知らない。「フルウ」ごは土地の言葉で「岩壁」の義であるが、この景勝の所に來て郷愁を忘れるのか、又は郷愁の念を起すごいふのかわからないごいふ。恐らく深碧な湖水を眺め、銀白な雪峰に圍繞せられて、自ら一種の暗愁に捉へられるのであらう。月影を仰いでごらるに二千里外の心を生ずるご同様である。北歐山間の青年が廣い世間をごひ慕ふ心も諒解せられる。これに反して、海國の子は遙か浪の彼方に幸福の影を幻視するであらう。山國の人と海國

(1) Interlaken.
(2) Heimweh. Pruh.
(3) Cable car.
(4) Jungfrau.

(五)「三五夜中新月色。二千里外故人心。」白樂天

の人の間には、皮膚の色を始め、眼、眉、口、全體の骨格その他にも著しい差異が認められるのであらう。ドイツで見ても、南北に依つて言葉のアクセントを別にし、發音に剛柔の差がある。すでに相貌言語の上に特徴があるとするれば、氣質の方面にもそれが存するはずである。凡そこれ等の觀察は、人文史の方面に於てはすでに過去に屬する陳腐の見方であるかも知れない。しかし私は元來、ひたすら個人をのみ見てあらゆる環境を無視する態度を取つてゐた。一口に、英人は、「こいひ」、「獨人は」、「こいひ」、「佛人は」、「こいふ」この危險を知悉してゐる。殊に狭い日本に於てさへ、その生地によつて直ちに人物の如何を臆測する早計といはゆる「愛郷心」なるものが意外の勢力を有して、政治上、經濟上にまでその影響を及し、單に郷土を同じくするが爲に黨閥を形づくり、互に他を排斥して自ら高しとする偏狹固陋を憎み嗤つた。ドイツの如きは絶えずこの分裂的思想の弊に苦しんでゐるのである。而してこの考は今日と雖も少しも變ることはない。國民性、或は一般に人間の氣質を形づくる上に於て、單に自然、國土等の先天的要素のみならず、歴史、經歷等の後天的要素のあることを併せて考へ

ねばならない。又境遇の變化交錯といふ事をも斟酌する必要がある。即ち人物を品評する場合には、何よりもまづ「個人」として取扱ふべきである。しかしこの事と境遇及び血統方面の考慮とは、兩立し得るものである。個性を觀察し、その個性を形成する諸要素を併せて探究することは、無用でないのみならず、屢必要である。從來かやうな人文地理的及び歴史的方面を殆ど無視し、「傳統」を論外に置いてゐた私は、世界に旅して始めてその點に目覺めたやうに思ふ。

三 落花の雪

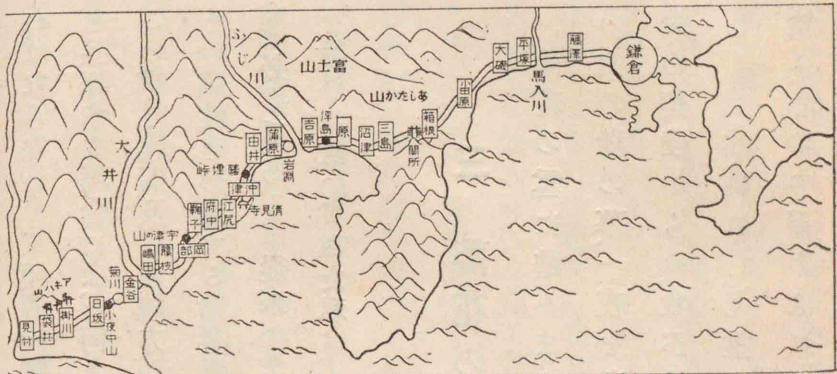
(一) 落花の雪に踏みまよふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦を着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜をあかすほどだにも、旅寝となれば物憂きに、恩愛の契淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行方も知らず思ひ置き、年久しくも住馴れし、九重の帝都をば、今を限りと顧て、思はぬ旅に出て給ふ、心の中ぞあはれなる。

(一)「またや見ん
交野のみの野の
櫻狩の花の雪
ちる春の曙」
(新古今集、藤原俊成)
(二)河内國北河内郡
(三)朝まだき嵐の山の寒ければ、紅葉の錦をき、紅葉の錦をき、人のそなき、(拾遺集、藤原公任)

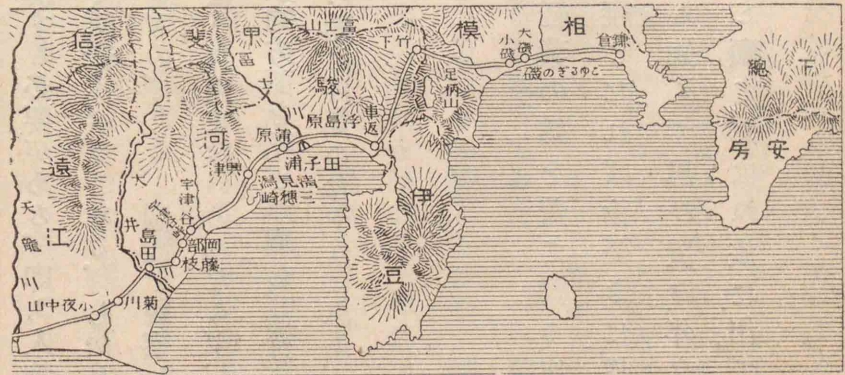
(一) 近江國滋賀郡

(二) 買物たえず
そなる東路
の勢多の長
橋音もさる
に風雅集
平兼盛

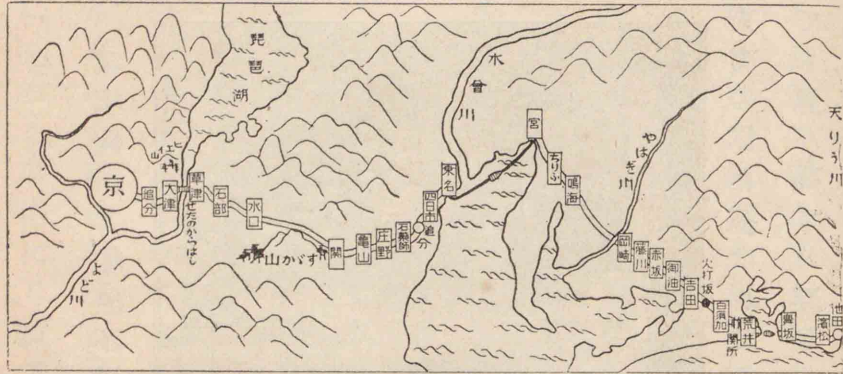
(三) 近江より朝
立ちくれば
の野にば
鶴ぞなく
明けぬこ
は古集
大歌所の歌



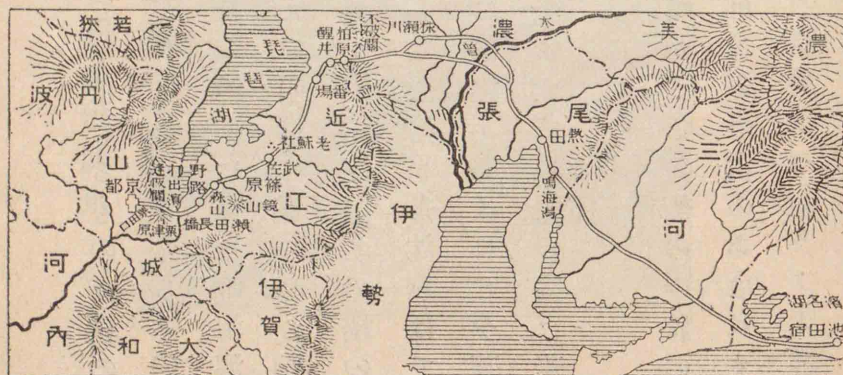
憂きをば止めぬ
逢坂の關の清水に
袖濡れて、するは山
路を打出の濱沖を
はるかに見渡せば
潮ならぬ海にこが
れ行く、身をうき舟
の浮き沈み、駒もこ
ごろと踏みならず、
勢多の長橋うち渡
り、行きかふ人にあ
ふみ路や、世をうね
の野に鳴くたづも、



(一) 白露も時雨
もいたくも
山は下葉の
こらす色づき
にけり、古今
集紀貫之



子を思ふかこあは
れなり、時雨もいた
く守山の木の下露
に袖濡れて、風に露
散る篠原や、篠分く
る道を過ぎゆけば、
鏡の山はありとて
も、涙に曇りて見え
わかず、ものを思へ
ば夜の間に、老そ
の森の下草に、駒を
さめてかへりみ
る、故郷を雲や隔つ



(一) 一人住まぬ不
破の關屋の板
底、荒れにし
後はたゞ秋の
風、新古今集、
藤原良經

(二) 「うちわたす
今か汐干にな
るみ鴻さにな
よる舟の聲も
通はず」夫木
道集、常磐井入

捨小舟

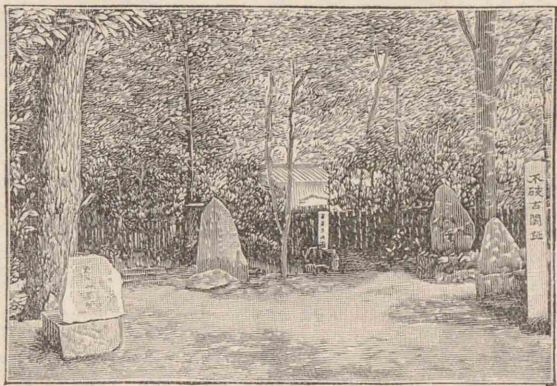
(三) 遠江國天龍川
の東岸、古は
西岸にあつた。

(四) 安徳天皇の御
代。

(五) 平清盛の子。
元暦元年(壽
永三年)一壽
谷の戦に源義
経に捕へられ
鎌倉に送られ
た。

らん。

番場醒が井、柏原、不破の關屋は荒れはてて、なほもるものは秋の



不破關址

雨の、いつか我が身のをはりなる、熱田の八つるぎ伏拜み、汐干に今や鳴海渦、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあはれと夕暮の、入相なれば今はとて池田の宿に着き給ふ。

東夷の爲に捕はれて、この宿にやごり給ひにし、その古のあはれまでも、思ひ残さぬ涙なり。

元暦元年の頃かこよ重衡の中將の

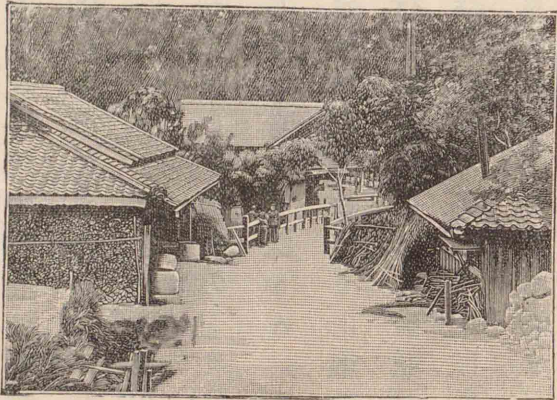
(一) 一年たけて復
こゆべしと
もひきや、命
なりけり小夜
の中山、新古今
集、西行法
師

(二) 遠江國榛原郡

(三) 仲恭天皇の承
久三年

旅館の燈かすかにして、鶏鳴曉を催せば、匹馬風にいばえて、天龍川をうち渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲路を埋み來て、そこも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が、いのちなりけり。と詠じつ、二たび越えし跡までも、羨ましくぞ思はれける。

隙ゆく駒の足はやみ、日すてに亭午に上れば、かれひまらするほごこて、輿を庭前にかき止む。ながえをたき、きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなり。と答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎によりて、光親卿關東へ召下されしが、この宿にて殺されし時、



池田宿

昔南陽縣菊水
今東海道菊川

汲下流而延齡
宿西岸而終命

こ書きたりし遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、あはれやいごごまさりけん、一首の歌を詠みて、宿の柱にぞ書かれける。

古もかゝるためしを菊川の

おなじ流に身をや沈めん

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞

きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花盛、龍頭鷲

首の舟に乗り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、

今はふたたび見ぬ夜の夢となりぬと、思ひ

つゞけ給ふ。

島田藤枝にかゝりて、岡への眞葛うら枯



菊川の宿 (東海道名所圖會)

(一)山城國葛野郡
龍峽。今の天
龍寺。
(二)ともに駿河
國志太郡
(三)「歸り来る程
はなれど朝
露の、岡邊の
眞葛うら枯れ
にけり。」藤原
爲家

(一)「駿河なる宇
都の山へのう
つにも、夢
にも人にあは
ぬなりけり。」
伊勢物語
(二)「駒さめて過
ぎそやられぬ
清見濁ちり
しく花や波の
關守。」(風雅
集注橋顯昭)
(三)「富士の嶺の
煙はなほそ立
ちのぼる。上
なきものはお
もひなりけり。」(新古今
集藤原家隆)
(四)「こゆるぎの
いそちなら
し磯菜つむら
めさしぬらす
な沖に居れ
波。」(古今集
相模歌)
(五)後醍醐天皇の
元弘元年

れて、もの悲しき夕暮に、宇都の山べを越えゆけば、鳶、楓いご茂りて
道もなし。昔業平の中將の、すみ所を求むとて、東の方へ下るとて、夢
にも人にあはぬなりけり。と詠みたりしも、かくやと思ひ知られた
り。

清見がたを過ぎ給へば、都にかへる夢をさへ通さぬ波の關守に、

いごご涙を催され、むかひはいづこ三保が崎、興津、蒲原うち過ぎて、

富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙上なき思にくらべつゝ、

明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎゆけば、しほひや淺き舟見え

て、おりたつ田子のみづからも、うき世をめぐる車がへし、竹の下道

ゆきなやむ、足柄山のたうげより、大磯、小磯見おろして、袖にも波は

こゆるぎの、いそごしもはなれども、日數積れば七月二十六日

の暮ほごに、鎌倉にこそ着き給ひけれ。

——太平記——

(一)唐の隱者。豐縣の西に寒巖、明巖の二巖あり。ついで寒巖に居たので寒山といふ。詩を善くし、拾得と親しくかつた。初唐の奇僧。初め遺見だつたが、豊干禪師に拾ひ養はれて因つて拾得と稱す。詩を善くした。亦棲遲觀自在

(三)能に似せた舞の振。本行は歌舞伎に對して、能をいふ言葉

(一)周代の音樂家で琴の名手。鍾子期がよくその音を知つて居たので、及んで死ねば破つてまた彈けなかつたといふ。

(二)舞踊にあはせる音樂。鼓、笛、太鼓、三味線などな合奏する。狂言に似せた舞踊の振。

四 寒山拾得

坪内逍遙

舞臺正面は二間の床の間、それに相應した大幅の掛物は、雪舟筆に擬したる墨畫の寒山拾得と見せて、背景だけが畫。立方は寒山拾得に扮裝ちて、活人畫式に背景に接近して立つ。二人とも鼠がかりたる服に古びたる墨染の腰衣。一人は巻物を、一人は箒を携へてゐる。はじめ謡曲がかり、中頃より長唄。

ここに寒巖に居して、すでに經たる凡幾年、棲遲して觀自在なり。時に歌曲を口ずさんで、世の憂きふしは白雲の、寂々たるたゞすまひ。

(三)この中本行がかりの振ありて、寒山、拾得徐に舞臺の中央へ出る。

石を枕に芝草を、いつも敷寝のつれづれは、古き佛の書を友、曆なけれど花に知る、春は籃に早蕨を、秋は果實を、こりづれの、この山間の樂みよ、我が身ながらに羨まし。

二人よろしくありて、拾得は胡坐し、寒山獨り徐に舞ふ。

へ聽けよ君、泉が撫づる伯が琴、子期ならなくに我ならで、誰辨へんこの調、へ面白の樂の音や。

拾得立ちあがりて、畫中の松ヶ枝にかゝりたる造物の瓢を取りおろし、二人一緒に舞ふ。

へいざ酌まん、泉に湧ける甘き酒、瓢に酌みて飲まうよ。

寒山胡坐し、拾得ひとり舞ふ。

へ大海の水に邊はなきものを、寄りくる魚の千萬が、同じ餌食にうち群れて、相食噉す痴肉團。へ悟らねばこそ妄執の、雲間に霞む月の影。

(二)合方俄に賑やかになると、寒山踊つて出る。

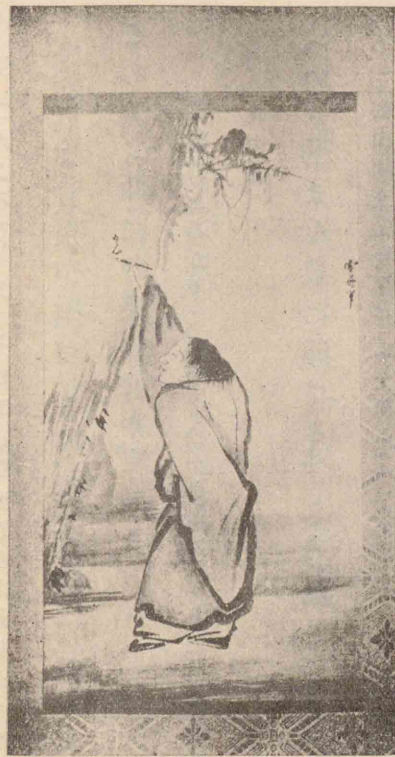
へ出たわく、お月ごのが出たわ。

(三)これより狂言がかり、禪家の問答模様、拍子にかゝりて白を言ひ、合方につれて踊り

廻る。

拾へ万年昔の山々は、
寒へ今も見ると山々、
拾へ万年昔の溪々は、
寒へ今も見ると溪々、
拾へ万年昔の月影は、

寒山、拾得も男であるが、作者は假見、得をして女の舞、踊劇を作つた。



(筆舟雪) 山 寒

寒へ今も見ると月影。

二人貌を見合はせて、

て、

二人へハ、ハ、ハ、

寒へお婆おのしは

ごここからごここへ。

父はなにももの、母

は誰。

拾へ父は鎌、母は

かつちり燧石、飛

んだ火花が、

寒へぬしか。

拾へおれぢや。

寒へおれぢや。



(筆舟雪) 得 拾

拾へぬしぢや。

二人貌を見合はせて、

二人へハ、ハ、ハ、

拾へお爺おのしはいくつになりやる。

寒へおれは虚空と同年。なんの虚空は死にやろごま、よ。山河大

地を我が子にもてば、此方は變らでいつまでも。

(一)村上天皇の頃
空也上人が民
庶勸化のため
瓢を叩きおも
しるい身振さ
口拍子に合は
せて念佛を唱
へたもの。鉢
叩さもいふ。鉢
空也念佛の振
まはれた舞踊の
振のこと。

拾へ淨裸々、赤洒々。
寒へ淨裸々、赤洒々。

よきころより空也念佛の振になる。

へ山深く月澄みて、颯々たる松の風、水音清き岩蔭に、鶴の翼を休め
けり。

元の通りの畫面にをさまりて暮。

五 大禮勅語

朕祖宗ノ遺烈ヲ承ケ、惟神ノ寶祚ヲ踐ミ、爰ニ即位ノ禮ヲ行ヒ、普
ク爾臣民ニ誥ク。

朕惟フニ、皇祖皇宗國ヲ肇メ、基ヲ建テ、列聖統ヲ紹キ、裕ヲ垂レ、天
壤無窮ノ神勅ニ依リテ、萬世一系ノ帝位ヲ傳ヘ、神器ヲ奉シテ八洲
ニ臨ミ、皇化ヲ宣ヘテ蒼生ヲ撫ス。爾臣民世世相繼キ、忠實公ニ奉ス。

列聖統ヲ紹ク

皇化ヲ宣ヘテ
蒼生ヲ撫ス

義ハ則チ君臣ニシテ、情ハ猶ホ父子ノコトク、以テ萬邦無比ノ國體
ヲ成セリ。

皇考維新ノ盛運ヲ啓キ、開國ノ宏謨ヲ定メ、祖訓ヲ紹述シテ不磨
ノ大典ヲ布キ、皇圖ヲ恢弘シテ曠古ノ偉業ヲ樹ツ。聖德四表ニ光被
シ、仁澤遐陬ニ露洽ス。

皇考

光被

仁澤遐陬ニ露
洽ス

不績ヲ續ク

照鑑上ニ在リ

朕今不績ヲ續キ、遺範ニ遵ヒ、内ハ邦基ヲ固クシテ永ク磐石ノ安
ヲ圖リ、外ハ國交ヲ敦クシテ共ニ和平ノ慶ニ賴ラムトス。朕カ祖宗
ニ負フ所極メテ重シ。祖宗ノ神靈照鑑上ニ在リ。朕夙夜兢業、天職ヲ
全クセムコトヲ期ス。朕ハ爾臣民ノ、忠誠其ノ分ヲ守リ、勵精其ノ業
ニ從ヒ、以テ皇運ヲ扶翼スルコトヲ知ル。庶幾クハ心ヲ同クシ、力ヲ
戮セ、倍、國光ヲ顯揚セムコトヲ。爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ體セヨ。

乾綱
坤維

六 大禮壽詞

臣重信謹ミテ言ス。伏シテ以ミルニ、
 陛下萬世一系ノ 寶祚ヲ踐ミ、乾綱ヲ攬リテ坤維ヲ總ヘ、爰ニ天津
 高御座ニ昇御シ、即位ノ大禮ヲ行ヒ給フ。遠邇瞻仰シ、億兆抃舞ス。臣
 重信誠懽誠喜頓首頓首。伏シテ惟ミルニ、
 皇祖天壤無窮ノ神勅ヲ 皇孫ニ錫ヒテ、八洲ニ君臨セシメ、三種ノ
 神器ヲ親授シテ、五部ノ神ヲ臣事セシメ給フ。萬世不易ノ 皇基
 確然トシテ爰ニ定マル。

皇宗英武聖明

皇祖授國ノ 宸意ヲ體シ、天業ヲ恢弘セムトシ、皇師ヲ帥キテ中州
 ヲ平定シ、皇位ニ即キテ萬機ヲ親裁シ、大ニ經綸ヲ行ヒ、洪範ヲ
 後聖ニ貽シ給フ。而シテ 皇孫ニ奉事セシ諸部ノ子孫、亦咸先志ヲ

洪範

皇謨

繼キテ皇謨ヲ翼賛ス。億載一統ノ皇業蔚爾トシテ維レ崇シ。

先帝登極ノ初、復古ノ廟策ヲ定メテ維新ノ皇圖ヲ啓キ、開國ノ鴻
 猷ヲ宣ヘテ萬邦ノ善長ヲ採リ、藩封ノ舊制ヲ廢シテ一途ノ治化ヲ
 施シ、不磨ノ大典ヲ布キテ立憲ノ政揆ヲ明ニシ、兵制ヲ建定シテ陸
 海ノ戎備ヲ嚴整シ、文教ヲ闡敷シテ黎元ノ智德ヲ啓養シ、産業ヲ殖
 興シテ厚生ノ道ヲ擴メ、制度ヲ釐革シテ庶政ノ規ヲ宏ニシ給フ。是
 ニ於テ乎國家ノ綱紀廓如トシテ光張シ、邦運ノ旺盛駸駸トシテ止
 マス。

陛下 大統ヲ承ケ、懿績ヲ續キ給ヒ、

皇祖 皇宗暨 列聖ノ宏謨ニ遵ヒ、丕基ヲ鞏固ニシ、德光ヲ宣揚シ
 テ天職ヲ全クセムトシ、宵衣旰食 聖衷ヲ勞シ給フ。今大禮ノ吉辰
 ニ方リ、明詔ヲ下シテ肇國ノ大本ヲ申明シ、臣子ノ恒道ヲ提誨シ給
 フ。臣等感激已ム無シ。

黎元

伏シテ見ミルニ、
 陛下仁孝恭儉ノ天資ヲ以テ至隆ノ治ヲ圖リ給フ。
 皇祖 皇宗暨 列聖ノ神祐
 陛下ノ聖躬ニ在リ、皇業愈昌ニシテ德澤益浹ク、頌音四海ニ洋溢セ
 ム。臣等 夙夜勤勉力ヲ戮セ心ヲ同クシ、忠盡ノ節ヲ勵マシ、報効ノ誠
 ヲ竭シ、以テ 聖旨ニ答ヘ奉ラムコトヲ誓フ。臣等 幸ニ盛儀ニ班列
 シ、瑞雲ノ鳳殿ヲ繞リ仁風ノ錦幢ヲ颺スヲ望ミテ、聳慶躍悅ノ至ニ
 任フル無シ。臣重信帝國臣民ニ代リ、恭シク大禮ヲ賀シ、千萬歳ノ壽
 ヲ上ツル。臣重信誠懽誠喜頓首頓首、謹ミテ言ス。

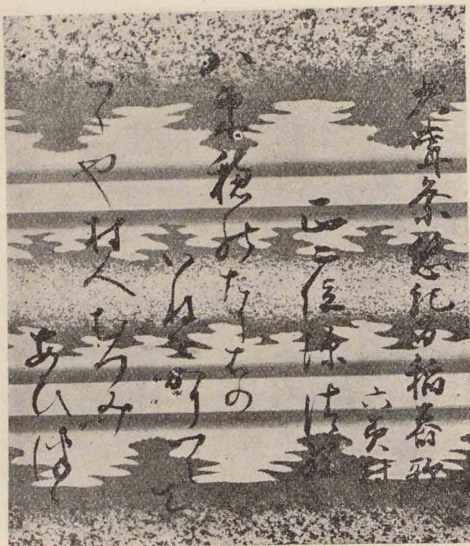
大正四年十一月十日

内閣總理大臣正 臣 大隈重信
 二位勳一等伯爵

大嘗祭 百修文

(一)大正四年十一月
 (二)も上皇の御所、今御苑の東に在る。
 (三)天皇即位後、新穀を以て皇祖神宗を始め天神地祇を祭り給ふ儀式を南方に板で作つた門。
 大嘗祭悠紀方稻春歌紀
 正六位美村源清網
 八束穂のたをりほのいねをかりつみや村ひつみあ
 (五)庭上に幕を張りまはした小舎。
 庭燎 庭上でたく火ぬばたま
 「黒い又は暗い」なごの枕
 稻春歌 大嘗祭に神に供へる米を春

(一)十日の即位禮から引續いての好天氣、大禮日和といふ語さへ出來た。十四日の夕方から仙洞御所内の朝集所に參集。世界に類のない森嚴な大嘗祭は、夜を徹して行はれるのである。控所は幾室にも分れて、眩いほどの電燈の光、一々呼上げる官氏名の順序によつて、左右二列に分れて、大嘗宮南板垣門内の(五)幄舎に着席する。電燈を籠めた數個の燈籠がほんのりと明るい。大嘗宮の柴垣が微に認められるだけである。火焚屋に燃える庭燎は、時に明るく、時に暗い。一同の着席が済むと、薄明るい燈籠の火も消されて、



田清網詠並に筆

ぬばたまの闇の夜である。
 一聲長い笛の音が樂舎から起つて、稻春歌が高らかに吟ぜられる。徐におごそかな調子で、神々しさが身にしむやうである。稻春歌が終つて、稍しばしの

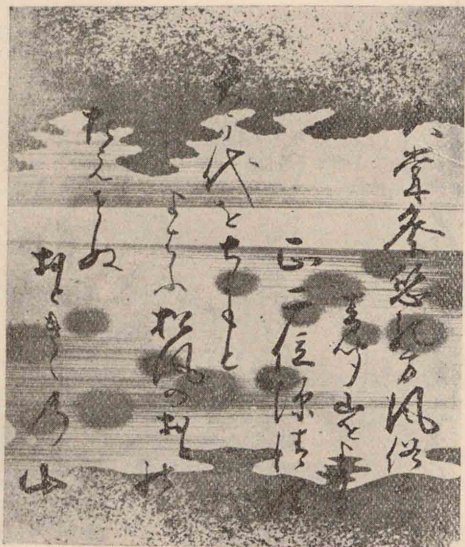
時歌ふ爲に
 特に即ち挿圖
 歌にありしもの
 されど作者が
 は子爵黒田清
 綱子爵入江
 爲守である
 悠紀は神
 祭の時天神
 祀る方主
 祇を同じく地
 方稻祭主基
 從三位守
 玉藻よし
 ぬきのやま
 たあきの代
 のあきの代
 やつくりね
 大和の地名
 國風は歌
 こゝで應神
 天皇の時吉
 野の國栖に
 酒のかもして
 獻つたの基
 風俗歌
 雅樂に用ひた
 歌曲の一種



入江爲守詠並びに筆

程を経て、再び歌聲が起る。今しも國栖の國風が奏せられるのであらう。つゞいて風俗歌が歌はれる。大禮使の官人が「起立」「着席」を呼ぶごとに、或は起立し、或は着座する。闇に包まれた千餘人の参列員は、端坐凝念して、身はさながら神代の昔に返つた心地である。今は掌典長の祝詞が濟み、廻立殿からの渡御もあつたのであらうと、御祭の次第を想像し奉るにも、森嚴な氣が刻々に迫るやうに覺える。余が着座したのは左方の幄舎で、折しも八日か九日の月が松の葉越しに白砂の上を照らす。折々一陣の寒風が吹いて、古雅な單調の樂の響が、いつまでも断えず續くのである。聖上には正に天神地祇を奉請あつて、御對坐あらせられるのである。樂の音の外には人の音は全くない。眞に莊重嚴肅を極めたものである。この莊重嚴肅な御祭は、太古

端坐凝念
 正しく坐つて
 一念をこらす
 (一)祭を掌る長官
 具綱
 (二)この時は岩倉
 召し御衣を着
 かへ給ふ所
 大嘗祭悠紀
 方風俗歌
 音聞山を
 よめる
 正二位
 源清綱
 君か代をち
 よもとよは
 ふ松風のお
 とのたえせ
 ぬおとき
 の山
 (一)宵に行はれる
 ので宵の御祭
 ともいふ
 基殿の御祭を
 曉の御祭とい
 ふ
 (二)十日朝九時半
 頃から春興殿
 式で行はれた儀



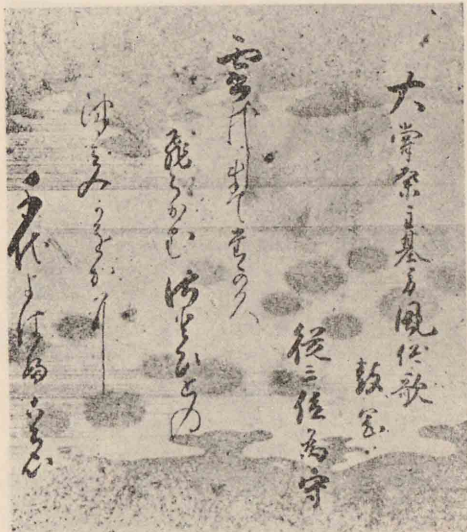
黒田清綱詠並びに筆

さながらの建築を傳へた大嘗宮の中に行はれて居るのである。かくて悠紀殿の御祭が終つたのは十一時二十分の頃であつた。朝集所へ立戻つて、夜食を賜はる。暖い御酒、熱い吸物、幾度か朱の御盃を傾けて、夜寒も忘れはてる。十五日の午前一時三十分、再び幄舎の座に着く。老齡の大官たちは拜辭して退下した爲であらう、幄舎の座席は以前より廣く覺える。この度は樂舎が近いので、歌樂の音も一層鮮に聞える。曉の寒さは三十分、一時間、次第に身にしむごともに、嚴肅な氣分は一層に加る。樂の音が止んで御祭のはてたのは、午前五時二十分であつた。朝集所に退下して、再び御酒御食を賜はる頃、東の空は漸く明るくなつた。十日の即位の禮には、賢所大前の儀にも、紫宸殿の儀にも、外國の使臣も悉

臣僚
臣下

大嘗祭主基
方風俗歌
從三位
岡
雲井まてた
かくひと
のつとみか
をかに千代
よはふこ
錦旗
にしきのみは
た
孝明天皇の安
政元年

く参列した。それは朝日の輝く御宮、夕日の照らす大庭に行はれたので、莊嚴であり、雄大であつた。それに引きかへて大嘗の大御祭は、夜陰の中に行はせられる。参列の臣僚は柴垣しばがきを隔てて、肅然として陛下の夜を徹しての親祭に侍



入江爲守詠並びに筆

坐するのである。たゞ「森嚴」といひ「神々しい」といふより外に、形容の語はない。即位の大禮に於ても、遠い國史を想ふの念は油然ゆぜんとして湧いた。春興殿前の威儀の人、紫宸殿前の大小錦旗きんかざり、古い國史の跡を考へて、愈々國家の昌運ちやううんを欣慶するの情に堪へず、今より六十餘年前に御建築になつた紫宸殿に對し奉つては、殊に最近五十年來の皇室の隆運を默想し奉らざるを得なかつた。この太古の儀によらせられた大嘗祭に於ては、更に國史の各時代を超越して、西洋の文明は勿論、唐土、三韓の文化も入つて來ない神代の

いそのかみ
一ふるしの枕詞。
をろがむ
拜む

夕月や納屋
も厩も謀の
影
鳴雪

ひきあみや
なきさの月
に雑魚わか
つ
子規

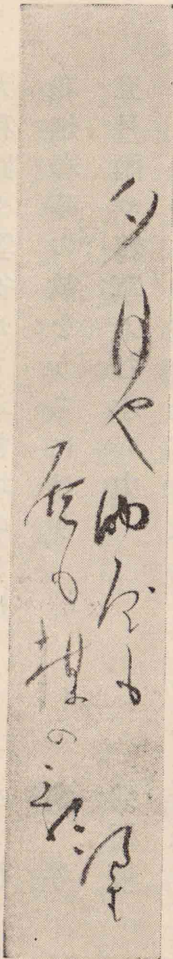
昔を追念して、我が國體の尊嚴無比なことを、今更のやうに感激するのであつた。

いそのかみ古りし神代の神業を
をろがみまつるけふのかしこさ。

七 秋の川

元日や一系の天子富士の山。

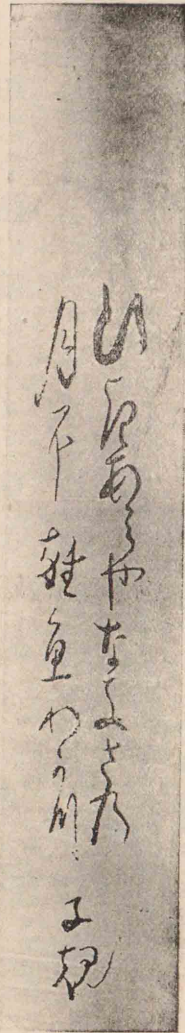
鳴雪



鳴雪筆

行く春やばうくとして蓬原。

子規



子規筆蹟

遠山に日の
當りたる枯
野かな
虚子

初雷や籠の鶉のくゝ鳴く。

虚子

筆子虚

門川に流れ
藻絶えぬ五
月かな
碧

大和路や雲雀おちこむ塔のかげ。
花畑春蒔の畝をうちにけり。
五月雨や鴉草ふむ水の中。

小波
素琴
碧梧桐

筆桐梧碧

白き蝶野路に吹かるゝ薄暑かな。
山百合にそゝぐ大雨やほこぎす。
口あいて佐渡が見ゆるゝ涼みけり。

青々
井泉水
紅葉

雨来らんと
して頻にあ
かる花火か
な
紅葉

筆葉紅

魚屑をかもめに投げつ冲膾。
早稲は花の曉の露笠涼し。
一山にひびく魚板や秋ゆふべ。
語草すでに盡きぬる夜長かな。
落葉降る音一しきり大伽藍。
秋の川眞白な石を拾ひけり。
一もじのここにさすらふ門流れ。

蝶衣
竹冷
繞石
四方太
紫影
漱石
句佛

筆影紫

始むへき試
楽の日なり
風薫る
紫影

策の底山吹
の落花叩け
ごも
乙字

大いなる池に日あたる寒さかな。
落葉ごも寒鮒網に入りにつけり。
癪三醉
乙字



蹟筆字乙

水色の空ひらけゆく雪の上。
瓊音

八百蟲譜

横井也右

(一)支那周代の人
孟子と同時代
世に莊子と稱
する。
(二)古今集序「花
すむ蛙の聲に
きけは生るも
のしづれか
歌をよまざり
ける云々」
(三)「古池やは
づまびこむ水
の音」芭蕉

蝶の花に飛びかひたる、優しきものの限りなるべし。それも、啼く
音の愛なれば、籠に苦しむ身ならぬこそ、なほめでたけれ。さてこ
そ、^(一)莊周が夢も、このものには託しけめ。
蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸
なれ。おぼろ月夜の風静まりて、遠く聞ゆるはよし。^(三)古池に飛びて、翁

の目覺したれば、このものこのこと、更に
も誇り難し。

(一)晋の嵇康の交
つた奇士。阮
籍、山濤、向秀、
劉伶、阮咸、王
戎、^(一)竹林の七賢で
ある。



(筆信元野狩) 賢七の林竹

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯
月の頃、端居珍しき夕、始めてほのかに
聞きたらん、又は長月の頃、力なく残り
たる、さびしき方もあり。蚊屋つりたる
家のさま、蚊やりたく里の煙など、かつ
は風雅の道具と^(一)なれり。藪蚊は殊には
げしきを、かの七賢の夜咄には、いかに
團扇のひまなかりけん。
蟬はたゞ五月晴に聞きそめたる程
がよきなり。やゝ日ざかりに鳴きさか
る頃は、人の汗絞る心地す。されば、初蝶

(一)「やがて死ぬ
げしきは見え
ず蟬の聲」
(芭蕉)

ごも、初蛙ごもいふことを聞かず、このものばかり初蟬ごいはるゝ
こそ、大いなる手柄なれ^(一)やがて死ぬ氣色は見えず。ご、このものの上
は、翁の一句に盡きたりごいふべし。

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は
草に露おく頃ならん。つくづくぼふしごいふ蟬は、つくしこひしご
もいふなり。筑紫の人の旅に死して、このものになりたり。ご世の諺
にいへりけり。あはれは蜀魄の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蠶の生涯は世の爲に終り、火取蟲は誰が爲に身を焦すにか。蜉蝣
ははかなき例に引かれ、蓼食ふ蟲は物好の誇ごなれり。

同じ寶の名によばれて、玉蟲は優しく、こがね蟲は卑し。

蝸牛はたゞ水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらん。家は持
ちたれごも、ゆく先々を負ひ歩くは、雲水の安きにも似ず。

蟹の歩に譬ふべきものこそなけれ。たゞ原^(二)吉原を、駕籠に乗りて、

(二)原は静岡縣駿
東郡吉原は
同富士郡
もに往吉五十
三驛の一

富士を眺めゆく人にぞ似たる。

機織、鈴蟲、響蟲は、その音の似たるをもて名に呼べり。松蟲のその
木にもよらぬに、いかでかく名を附けたるならん。毛生ひむくつけ
き蟲にも同じ名ありて、松を枯し、人に疎まる。一つ、在所に二人の八
兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事ごす。これ松蟲の類
なるべし。

蟋蟀のつゞりさせごは、人の爲に夜寒を教へ、藻にすむ蟲はわれ
からご、たゞ身の上を歎くらんを、蓑蟲のちゝよご呼ぶは、いごやさ
しげなり。されご、父のみこひて、なごか母を慕はざるならん。

——鶉衣——

むくつけき

(一)「秋風に結び
ぬらし藤袴、
つゞりさせて
ふきりぎりす
なく」(古今
集、在原棟梁)

(二)承久三年。
(三)順徳天皇。
(四)仲恭天皇。

九 新島守 一 その一

四月二十日帝おりさせ給ひ、春宮四つにならせ給ふに譲り申さ

(一)土御門院。
(二)後鳥羽院。

(三)近衛基通の子。

(四)後京極良經の子。

(五)當時の將軍頼

經。鎌倉に在

つた。

(六)後鳥羽院。

(七)鎌倉幕府方。

かつく
御勤事

せ給ふ。近ごろ皆この御齡にて受禪ありつれば、これもめでたき御
行末ならんかし。同じき二十三日院號の定めありて、今おりさせ給
へるを新院とさきこゆれば、御兄の院をば中院と申し、父みかどをば
本院とぞきこえさする。このほごは家實のおとこ、關白にておはし
つれど、御讓位の時、道家のおとこ、攝政になり給ふ。かのあづまの若
君の御父なり。

さても院の思し構ふること、忍ぶとすれどやうく漏れ聞えて、
ひがしごまにその心づかひすべかめり。あづまの代官にて伊賀の
判官光季といふものあり。かつく彼を御勤事の由仰せらるれば、
身方に参りつるつはものごも押寄せたるに、遁るべきやうなくて、
腹切りてけり。まづいごめでたしとぞ院は思し召しける。

あづまにもいみじう慌て騒ぐ。さるべくて身の失すべき時にこ
そあなれと思ふものから、討手の攻來りなん時に、はかなきさまに

(一)北條義時。
(二)北條時房。
(三)義時の長子。

うしろめたき
心



て屍を暴さじ。おほやけと聞ゆとも、みづからし給ふ事ならねば、か
つはわが身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、弟の時房と、泰時

後鳥羽のたび都に参らすは思ふところ
といふ一男と、二人を頭として、雲霞
の兵をたなびかせて、都に上す。泰時
を前に据ゑていふやう、おのれをこ
多し。本意の如く清き死にをすべし。
天人にうしろ見えなんには、親の顔ま
皇た見るべからず。今を限りと思へ。賤
しけれごも義時君の御爲にうしろ
めたき心やはある。されば横ざまの
死にをせん事はあるべからず。心を猛く思へ。おのれ打勝つものな
らば、二たびこの足柄、箱根は越ゆべし。など泣くく、いひきかす。ま

ここにしかなり。また親の顔拜まん。こゝもいと危しと思ひて、泰時
も鎧の袖をしぼる。かたみに今や限り。あはれに心細げなり。
かくて打出でぬる又の日、思ひがけぬほごに、泰時たゞ一人鞭を
あげて馳來たり。父胸打騒ぎて、いかに。と問ふに、軍のあるべきやう、
大方の掟なごは、仰の如くその心を得はべりぬ。若し道のほごりに
も、はからざるに忝く鳳輦を先立てて、御旗を擧げられ、臨幸の嚴重
なるこゝも侍らん。に参りあへらば、その時の進退いかゞ侍るべか
らん。この一こゝを尋ね申さん。とて、一人馳歸り侍りき。といふ、義時
とばかり打案じて、賢くも問へるをのこかな。その事なり。まさに君
の御輿に向かひて、弓を引く事はいかゞあらん。さばかりの時は胃
を脱ぎ、弓の弦を切りて、ひこへにかしこまりを申して、身をまかせ
奉るべし。さはあらで、君は都におはしましなから軍兵を賜はせば、
命を捨てて、千人が一人になるまでも戦ふべし。といひも果てぬに、

とばかり

かしこまりを
申す

急ぎ立ちにけり。

都にも思しまうけつる事なれば、ものゝふごも召しつごへ、宇治
勢多の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用心こゝなり。公經の大
將ひごりのみなん、御うまごのこゝもさる事にて、北の方、一條中納
言能保といふ人のむすめなり、その母北の方は故大將のほらから
なれば、一方ならずあづまを重く思して、さしいらへもせず、院の御
心の輕きこゝとあぶなかり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門
大納言忠信、尾張中將清經、中御門大納言宗家、又修明門院の御はら
からの甲斐宰相中將範茂なご、つぎ、數多きこゆれご、さのみは
記し難し。いくさにまじり立つ人々、この外の上達部にも殿上人に
も數多ありき。
中院はあかで位をすべり給ひしより、言に出でてこそ物し給は
ねご、世のいと心やましきまゝに、かやうの御さわぎにも、殊に交ら

(一)藤原氏、西園
寺家の祖。

(二)將軍賴經の、
公經の女の出。

(三)賴朝をいふ。

(四)藤原殖子、後
鳥羽院の御母。

(五)藤原重子、順
徳院の御母。

上達部
殿上人

すべる

龍馬

ひ給はざめり。新院は同じ御心にて、よろづいくさの事などもおきて仰せられけり。

いつの年よりも五月雨はれ間なくて、富士川、天龍なごえもいはず漲りさわぎで、いかなる龍馬も打渡し難ければ、攻上る武者ごもも怪しくなやめり。かゝれごも遂に都に近づく由きこゆれば、君の御武者も出でたつ。その勢六萬餘騎とかや。宇治、勢多へ分ち遣はず。世の中ひゞき罵るさま、言の葉も及ばずまねび難し。あるは深き山ににげ籠り、遠き世界に落下り、すべて安げなく騒ぎ満ちたり。いかがあらんご君も御心亂れて、思し惑ふ。かねては猛く見えし人々も、誠のきはになりぬれば、いご心あわたゞしく色を失ひたるさまごも、たのもしげなし。六月二十日餘りにや、いくばくの戦だになくて、終に身方のいくさやぶれぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時ご時房ご亂れ入りぬれば、いはん方なく呆れて、上下たゞ物に

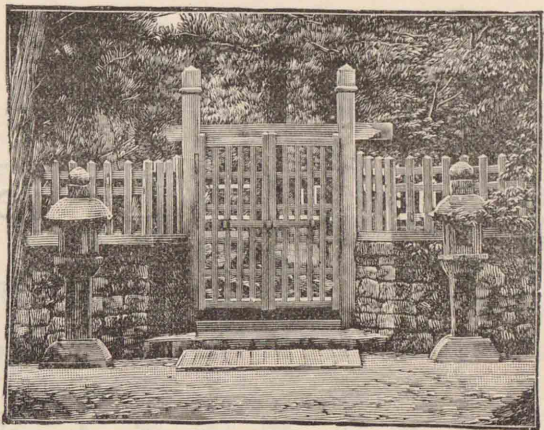
ぞあたり惑ふ。

一〇 新島守 その二

あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍はからひおきてつゝ、保元の例にや、院の上、都の外に遷し奉るべしご聞ゆれば、女院、宮々、所々に思し惑ふご更なり。本院は隱岐國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ網代車の怪しげなるにて、七月六日いらせ給ふ。けふを限りの御ありき、あさましう哀なり^(一)ものにもがなや^(二)ご思さるゝもかひなし。その日やがて御髪おろす。御年四十に一つ二つや餘らせ給ふらん、まだいご惜しかるべき御ほごなり。信實朝臣^(三)召して、御姿寫し書かせらる。七條院へ奉らせ給はんごなり。かくて同じ十三日に御舟に奉りて、遙かなる波路を凌ぎおはします御心地、この世の同じ御身ごも思されず、いみじういかなりける代々の

(一)山城國紀伊郡鳥羽にあつた難宮。
 (二)「さりかへす」ものにもがなや世の中をありしなごらんのわが身ご思はん源氏物語語海抄。
 (三)藤原信實。畫家として著れて居る。文永二年(一九二五年)歿。年七十。

(一)秦の第三世子
嬰のこ。始
て四十六日
漢の高祖に降
り秦は滅びた。



(陵皇天德順) 陵野真國渡佐

御心もて

報にかご怨めし。新院も佐渡國に遷らせ給ふ。まことや七月九日み
かごをもおろし奉りき。この卯月かごよ、御讓位ごてめてたかりし
に、夢のやうなり。七十餘日にており給
へる例も、これや始なるらん。唐土にぞ
四十五日ごかや位におはする例あり
ける。ごぞ、唐の文讀みし人のいひし心
地する。それもかやうの亂やありけん。
さて上達部、殿上人、それより下、はた殘
るなくこの事に觸れにしたぐひは、重
く軽く罪に當るさまいみじげなり。
中院は初より知ろしめさぬ事なれ
ば、東にも咎め申さねご、父の院遙かに遷らせ給ひぬるに、ごかに
て都にあらん事、いと恐ありご思されて、御心もてその年閏十月十

(一)土佐國の西南
幡多郡
(二)後嵯峨天皇。
(三)土御門天皇の
御母在子
せうと
(四)源通子。
北面の下藤
召次

わりなきこと

うたて

日、土佐國の幡多(一)といふ所に渡らせ給ひぬ。去年のきさらぎばかり
にや、若宮いでき給へり。承明門院の御せうごに、通宗の宰相中將ご
て、若くて失せ給ひにし人の女の御腹なり。やがてかの宰相の弟に
通方といふ人の家に止め奉り給ひて、近くさぶらひける北面の下
藤一人、召次なごばかりぞ御供つかうまつりける。いと怪しき御手
輿にて下らせ給ふ。道すがら雪かきくらし、風ふきあれ、ふゞきして、
來し方行く先も見えず、いと堪難きに、御袖もいたく凍りて、わりな
きご多かるに、
憂世にはかゝれごてこそうまれけめ
ごごわり知らぬ我がなみだかな
「せめて近きほごに。」ご東より奏したりければ、後には阿波國に遷ら
せ給ひにき。
さてもこの度世の有様、げにいごうたて口惜しきわざなり。ある

よせ
きさみ

むげ

(一)平將門。
(二)藤原純友。

(三)源義親。

(四)後白河法皇。

御裳濯川の流

(五)藤原信賴。
おほけなく

(六)二條天皇。

は「父の王を失ふ例だに一萬八千人までありけり。」とこそ佛も説き
給ひためれ。まして世下りて後、唐土にも日の本にも、國を争ひて戰
をなすこと數へ盡すべからず。それも皆一ふし二ふしのよせはあ
りけん。若しはず異なる大臣、さらでもおほやけともなるべきき
さみの、少しのたがひめに世に隔りて、その恨の末なごより事起る
なりけり。今のやうにむげの民と争ひて君の滅び給へる例、この國
にはいと數多も聞えざめり。されば承平の將門、天慶の純友、康和の
義親、いづれも皆猛かりけれど、宣旨には勝たざりき。保元に崇徳院
の世を亂り給ひしだに、故院の御位にて打勝ち給ひしかば、天照大
御神も御裳濯川の同じ流と申しながら、なほ時の御門を守り給は
する。こゝは強きなめり。とぞ古き人々も聞えし。又信賴の衛門督お
ほけなく二條院を脅し奉りしも、終に空しき屍をぞ道の邊に棄て
られける。かゝれば舊りにし事を思ふにも、なほさりともいかでか

あやなき業

(一)後鳥羽院。

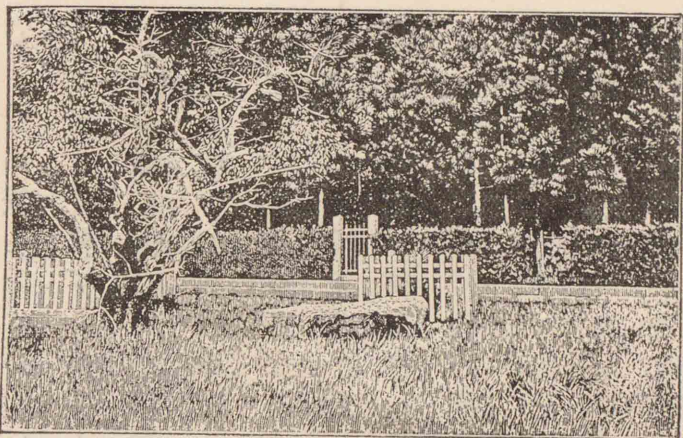
(二)「津の國のこ
ふさも人をい
ふべきに、隙
の八重葦、一
拾遺集、和泉
式部」
藐姑射の山
霞の洞

三皇、今上數多在します王城の、徒に亡ぶるやうやはあらんと、頼も
しくこそ覺えしに、かくいさあやなき業の出できぬるは、この世一
つの事にも非ざらめども、迷の愚かなる前には、尙いと怪しかりし。
六つにて位に即かせ給ひて、十三年おはしましき。おり給ひて後
も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下は同じ事なりしかば、す
べて三十六年がほご、この國のあるじとして萬機の政を御心一つ
に治め、百の官を従へ給へりしそのほご、吹く風の草木を靡かすよ
りもまされる御有様にて、遠きを憐み近きを撫で給ふ御惠、雨の脚
よりも繁ければ、津の國のこやのひまなき政を聞し召すにも、難波
の蘆の亂れざらんことを思しき。藐姑射の山の峰の松もやうく、
枝を連ねて、千代に八千代を重ね、霞の洞の御住居、幾春を経て、空
行く月日の限り知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、あ
りありてよしなき一ふしに、今はかく花の都をさへ立ちわかれ、已

こと問ふ

がちりぐにさすらへ、磯の苫屋に軒を並べて、自らこゝ問ふもの

こては、浦に釣する蟹小舟。鹽やく煙の
靡く方をも、わが故郷のしるべかこぼ
かり眺め過させ給ふ御住居どもは、そ
隠れまでご月日を限りたらんだに、あす
岐知らぬ世のうしろめたさにいご心細
仙かるべし。まいていつをはてごか廻り
宮あふべき限りだになく、雲の浪、煙の浪
址の幾重ごも知らぬ境に世をつくし給
ふべき御様ごも、口惜しごいふもおろ
かなり。



き島の中なり。海面よりは少しひき入りて、山蔭に片そへて、大きな

このおはします所は、人ばなれ里遠

けしきばかり

事そぎたり

柴の庵のしば

故づく

すまれば

だすまれば

ん柴の庵の

しに新古今集

西行法師の造

後鳥羽院の攝

津國三島郡島

本村

享保元年正月
十二日大火に
類焼した鳩巢
で贈つたもの
である

かなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱、葦ふける廊なご、けし
きばかり事そぎたり。誠に柴の庵のたゞしばしごかりそめに見え
たる御やごりなれご、さる方になまめかしく故づきてしなさせ給
へり。水無瀬殿思し出づるも夢のやうになん。遙々ご見やらるゝ海
の眺望、二千里の外も残りなき心地する、今更めきたり。汐風のいご
こちたく吹來るを聞き召して、

われこそは新島守よおきの海の

あらし浪風こゝろして吹け。

— 増 鏡 —

一一 室鳩巢へ贈る

新井白石

昨日の御報拜誦、驚嘆是非に及ばず候。然りと雖も火急のごころ
に、御全家御異事なく候を、この上の多幸ご思し召さるべく候。當時
御寓居藩府の中、御遠慮多しご、いかにも御尤もに存ぜられ候。但し

常の時とちがひたる事にも候、只今の事に候間、なか／＼少しも御容身ちよほごの所も得難く、これあるべきに候。須臾御覽合はせられ候て、御身をよせられ候方を、同じながら御心靜かに御求め然るべき事に候。これより行先の事は、必ず／＼天分に御任せ、ごやか／＼御思惟に及ぶまじき事に候。流止行藏もごより期し難き事のみ候。たゞたゞ惜しむべきは、多年御拮据にて御求め得られ候御書籍と、御手録のもの事は、承り候だに心を苦しめ候。但しこれも身より外のもの、是非に及ばず候。貴兄すでに御學業も成就候へば、これより後は、書籍を頼みて頼まぬ事に候。令郎は未だ御學問未成業の御事に候へば、せめて書籍をば御殘し候御謀の事、あながちに俗輩が田を買ひ候等の事に比すべからず候。某家藏の書もごより多からず候へども、二重になり候もの少々これあり候。書目の簿も、何の内にやらん入置き候也。昨夜たづね候へども、知れず候へば、覺え候處

(一) 土肥霞州のこ
人。白石の門
(二) 深見元岱のこ
官。幕府の儒
(三) 白石の師木下
順庵の文庫
錦里は順庵の
號

は、監本の四書、茅鹿門の史記漢書など有之候。則ち令郎へ進ずべく候。この外の書、恩賜の物の外は、何にても御用次第御貸し申すべく候。御事も缺かせ申すまじく候。この節手前の事は、御物語り申候通り故、僅かの御用にも立ち候はぬこと、口惜しく候へども、力なく候。御上着など、これなく候はん歎。その段は恩賜の物なほこれあるべく候。必ず御心おきなく仰せ下さるべく候。廉潔を立て候も事にもより、相手にもより候。よのつねの同門も、兄弟の親に同じく候。況やたゞに同門と申すばかりにもこれ無く、秦風は子と同胞と申すは、この事に候。仰せ下さるゝも、少しも／＼御耻づかしかるべき事にもなく候。必ず／＼子々たる小丈夫の如く、又匹夫匹婦が溝瀆にくびれ候如き事は、吾が儕にあるまじき事に候。^(一)土肥生事も、ごより貧困の上、かくの如き事は御察しなさるべく候。深見翁の事も、何やかや焼失、これ亦居所に惑はれ候事に候。^(三)錦里文庫は存候由承知、せ

めてもの事に存候。これも麴町邊へ借宅あるべき由に候。それに今
しばらく御滞留候はば、なにぞ小舟になりとも、辻駕籠になりこ
も御乗り候て、深川一色町いっしょくと御尋ね御出でなさるまじく候や。一面
に事を談じたき事のみ候。返す／＼その許御引きはなれば、旬日
の間御猶豫のかた、ましに候はんかと存候。貴報に及ばず候。已上。

尙々貴報下され候はば、舊宅へ下さるべく候。今までの屋敷、望
み候人候はば、早々御貸し然るべく候。

二二 我が國の繪畫

藤岡作太郎

日本畫と西洋畫とは漸次混融して、その區劃も明瞭ならざるに
至るが如しといへども、この兩者の純粹なるものを比較すれば、各
自の特色はなほ甚だ顯著なり。嘗に絹紙と彩具との相違のみなら
んや、その用意筆法等に於てみな然り。彼にあつては藝術は科學と



平 等 院 屏 畫

理性は想像の
衝

腦裏の印象

瀟洒

輪奐

彫塑

並行し、理性は想像の衝となりて、遠近明暗つとめて自然に背かざらんことを期し、此にあつては文化の精神的方面、ひきりまづ進み、筆を揮ふもの感興に乗じて、腦裏の印象を瀉ぎ出す。彼は色彩を旨とし、此は描線を重んじ、彼は實相の通りに空氣の色をも漏らすことなく、此は主體の外は生地のみまゝに存す。一は濃艶、一は瀟洒、一は輪奐たる樓臺に顯官が客を引く如く、一は幽閑なる茅屋に高士が梅を愛するに似たり。これ等の差別は、蓋しその初よりして然りしにあらず、各自獨立したる歴史が漸次に養成したるものにして、今はた両洋交通の歴史によりて、これを合一せんとする傾向あるなり。

我が國の文藝に於ける、佛教の感化の甚深なることは、多言を要せず。眞の美術の歴史といふは、聖徳太子の佛教興隆に始り、爾來進歩劇甚、以て偉大なる奈良朝に及べり。されどこの時代も、彫塑に於

てこそ千古無比の名を博すべけれ、繪畫の歩調は未だこれに伴なはず、平安朝に巨勢金岡が出てし頃より、漸く丹青全盛の世は來れるなり。而して奈良朝の彫塑がなべて佛像なるが如く、平安朝の繪

畫も概して佛畫の外



吉 祥 天 女 (樂師寺藏)

に出でず。按ふに平安朝の如く形式美を偏重したる時代は、他に類例を見ず。佛教も亦形相の具足によりて、内心の信仰に近づくべしとしたり。法成寺

(一)法勝寺の如き、今廢墟をだに存せざれども、金堂講堂七寶莊嚴、天を摩する大塔、虹と曳く廻廊、すべて一代の工を盡しし状態は、歴史の

形式美

形相

(一)承暦元年(一七三七年)白河天皇の創建、足利氏の末の世廢滅、七寶莊嚴

(一)山城國宇治に在る。

轉讀

紫雲の來迎

傳ふるごころ。今に存する鳳凰堂を見ても、その一端を覗ふべし。香煙徐に薫じて幢幡を掠め、蓮華頻りに散つて轉讀にたぐふ。龍頭の舟は池上に浮かんで笙鼓月に冴え、頻伽の袖は庭前に翻りて舞容風に堪へず。恰もこれ坐ながらなる極樂淨土、紫雲の來迎を待たずして、身はすでに汚濁世界を離る。かくの如き場に用ふる畫像なれば、彩華炫耀、丹碧映射、その色は珊瑚水晶を碎き、その線は黄金の箔を切り、或は慈悲圓滿、或は忿怒破邪、十分に濃く、飽くまで鮮に、精を窮め、微を闡きて、後世の乾枯洒脫なるものとは全く選を殊にしたること、想見するに足れり。

鎌倉時代の繪卷物もまた日本繪畫の精華なり。平治物語繪卷等は源平鬭争の慘狀を寫し、圓光大師畫傳等は新佛教勃興の機運に従ふ。いづれも時代の反映にして、また不朽の逸品たるを失はざれども、内容外形ともに根本の變化を受けたるは、實に東山時代の繪

(二)現存三卷。住吉慶恩が畫がき藤原家隆が詞書したといふ。
(三)四十八卷。古碕畫がき林親雲竹書した。

(一)畫僧。名は等楊。備中の入道。後周防山口の雲谷寺に住んだ。永正三年(一六六)歿。年八十七。

提撕

香茶の技

結跏趺坐

教外別傳
以心傳心

蒼枯
恬澹
破墨一掃

畫にして、僧雪舟(一)その代表者たり。この革新は禪宗の提撕(二)によりて成り、鎌倉時代にこの宗の傳來せしより漸く養ひ來れる勢力の、ここに頂點に達したるものにして、香茶の技と榮枯をこもにせり。そもそも平安朝の佛寺を去つて禪刹の門をくぐるや、彼此別天地の



感なくんばあらず。結跏趺坐して寂靜の境に入れば、物の美醜も目を遮らず、一旦その道に悟入すれば、經典畫佛像何の要かあらん。教外別傳といひ、以心傳心といひ、精神を主として形體に泥まず。例へば、能樂に何等の

背景を設けずして、しかも能く雲煙萬里の情趣をしのばしむるが如し。繪畫もこれに同じく、色を棄てて筆に託し、巧を抛ちて氣を驅り、蒼枯にして恬澹、破墨一掃して遠山を産み、秃筆數行にして樹石

流風餘韻

(一)狩野正信に起り元信の大成した一派。

(二)土佐派の一派。鎌倉時代の住吉慶恩に起る。傳へる。

先人の糟粕を嘗む

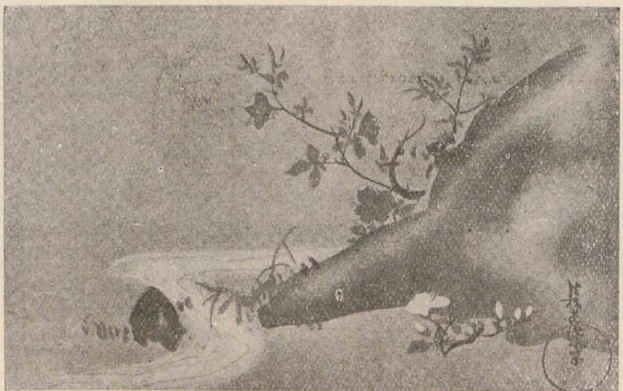
(三)尾形光琳。京都の人。享保六年(一七三二)歿。年五十四。

(四)英一蝶。大阪の人。享保九年(一七三六)歿。年七十四。

(五)安房の人。號友竹。正徳四年(一七二八)歿。年七十四。

時世粧

を刻む。一見すれば兒戲、熟視すれば神工、益味はうて益趣あり、恍惚



光琳筆 (圖 題 躑)

として吾我を忘る。即ちこれ東山時代の特色にして、流風餘韻延いて近代に及べり。

桃山時代は豪華の氣一世を蓋ひ、繪畫も稍移りて雄大穠麗の風を喜びしといへども、未だ東山の根據を衝くに及ばざりき。江戸時代に至つて、幕府が消極の方針は、更にその規模を縮めて枯淡の域に歸らしめ、門閥の貴に誇れる狩野、住吉も先人の糟粕を嘗むるのみ。元祿の盛時には、裝飾に傾ける光琳、滑稽の才ある一蝶あり、菱川師宣以來の浮世繪が時世粧を寫して、山水花鳥以外に題目を求め

(一)池野大雅

匠氣

氣韻生動
第一義

(二)圓山應舉

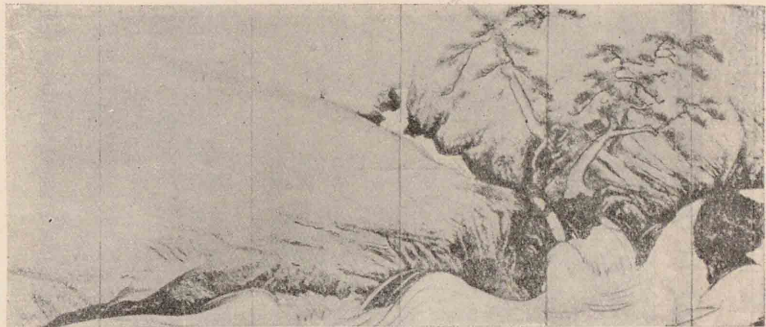
波の人。寛政
七年(二四五
五年)歿。年六
十三。

(三)田中訥言

都の人。文政
六年(二四八
三年)歿。名
菊池容齋。

(四)武保

は。明治
十一年歿。年
九十一。



(圖) 湍 奔 筆 舉 應 山 圓

たるは、最も注意すべし。雖も、鄙俗に流れ
て、遂に高尚なる趣味に應ずる能はず。大雅
等の文人畫は、東山の繪畫に比するに、全然
別種のものに屬すれど、匠氣を忌み、形似を
疎にし、氣韻生動を第一義とするところは
即ち相似たり。應舉等の寫生畫は自然の摸
寫に力めて、別に一流を立てたるものなれ
ども、亦清淡洒脱の習を脱するを得ず。訥言
が創めたる土佐古風、容齋が好める歴史畫
の如きは、即ち學界に於ける國學の興隆に
齊しく、又時勢の反響なり。但し此は彼の如
き價値なきを憾とするのみ。一派又一派、各
盛衰の數を免れざりしが、未だその間に崛

起して斯道の根本的革新に成功せるものなく、かゝる裡に明治の
昭代は來れり。
——東園遺稿——

佛像彫刻 (自修文)

瀧 精 一

支那、日本の彫刻は、いづれも印度傳來の佛教に伴なつて開けたものである
ことは明白である。又印度の方ではギリシャの影響が存外大きいことから、延
いて支那、日本の彫刻が印度並びにギリシャ的風致を傳へて居ることも、今日
では殆ど動かすことの出來ぬ定説となつてゐる。

元來支那本國では、佛教渡來以前には、さのみ彫刻の發達してゐた形跡は認
められない。實に支那上古に於ける偶像彫刻は微々たるもので、僅かに金石類
の工藝的な彫刻が行はれてゐたに過ぎないやうである。これは一つには、その
國の古代の風習が然らしめたのであらうと思はれる。特に支那では、その特殊
な倫理主義に基づいて、懲惡の目的を以て惡人の像を作り、これを打つたり毀
つたりした。銅器などの工藝品でも、さまざまの姦惡な者の像を刻する風が行

(一)文學博士。東
京帝國大學教
授。有名な畫
家。和亭はその
父。東京の人。

はれた。ところが、一體美術としての彫刻には、悪人の像は不適當なのだから、かういふ物の盛に行はれたといふことは、とりもなほさず、この國の藝術の發達することの出来なかつた所以なのである。

我が國では佛教渡來以前にも、土偶類は隨分盛に製造せられたに相違ないが、



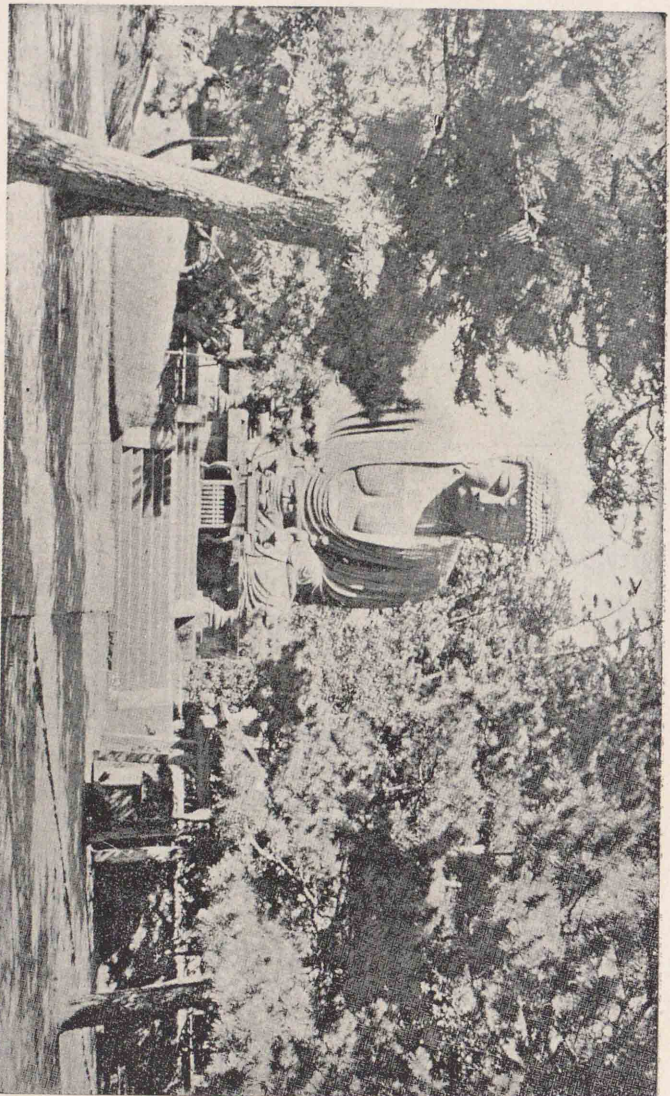
梵天(東大寺三月堂)

これ等は専ら崇拜の對象として作られたものではなく、單に實在人の代用に供せられたに過ぎない。それで佛教の輸入せられたからの彫刻はどうかといふと、最初は印度、ギリシャ式そのま

まの物が多かつたのであるが、次第に自國の風に變化して來て、新機軸、新意匠を出して、支那や朝鮮は勿論、その本家たる印度以上に進歩したのである。

我が國では、推古時代が始めて佛像彫刻の開けた時代で、この時代の作品はなほ素朴の域を脱してゐない。然るに天平時代に至つて異常な發展を來した。

(一)第三十三代、
三年(在位一二五八年)
(二)第四十五代聖武天皇の時



鎌倉大佛

(一)奈良市。華嚴宗の大本山。聖武天皇の創建。大佛を以て名高い。三月堂はその城内に在り。又法華堂。又金鐘寺。又僧良辨の開基。

(二)大和國生駒郡都跡村。法相宗の大本山。天武天皇の創建。金堂は本堂のこゝ。

(三)授戒の式を行ふ所。四天王は持國天。増長天。廣目天。多聞天。佛の守護の神。

(四)Athene.

ギリシヤ神話に甲冑を着て凱歌を奏するから主神ゼウスの頭部から躍り出た女神ヘラ。ラスミ。ローマ名ミネルバともいふ。

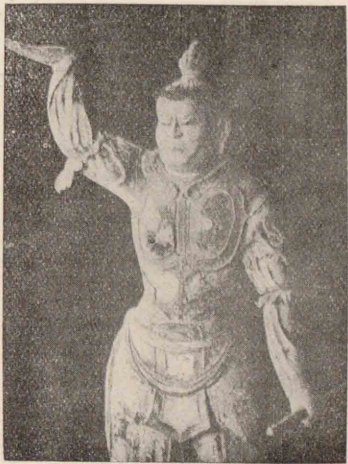
勿論當時は支那唐代の感化もあつたが、又大いに獨立自由の發達が見られるのである。史家は或は天平時代を以て日本彫刻の黄金時代だと稱へてゐる。いかにも今日遺つてゐる當時の作品中、東大寺三月堂の梵天、帝釋の如き、藥師寺金堂の藥師三尊の如き、東大寺戒壇院の四天王の如きは、日本藝術史を飾る至妙な作品といはねばならぬ。藥師は面相が豊満で、體格もよく整ひ、衣紋も流麗で、いかにも自然に出來てゐる。三月堂の梵天、帝釋の方は、前者のやうに豊満ではなく、寧ろ崇高典雅と評すべきで、一種いふべからざる神的な性格を象徴し、形體



アテーネ女神像

と思想の融合宜しきを得てゐる。人或はこれを以てギリシヤ彫刻のアテーネ神の倂のあるものと評するのも、あながち失當の言ともいはれない。戒壇院の四天王に至つては、表情、權衡皆宜しきを得た上に、沈着篤實の趣を具へてゐる。抑、天平時代の彫刻は面貌、姿態、衣紋等の諸點に於て精妙なところのあるは

Laocoon. ギリシアの傳説に、トロイの軍士が、敵軍の馬を忍び、城の中に送つた。槍を執つて、腹を突き、計が將に敗れ、海神ネプチューンが頭を海に放つたので、二子も蛇に巻殺された。この彫像は、この



趣を缺いて、人をして輕佻不安の念を抱かしめるものは、決して眞に理想的な作品といふことは出来ない。天平彫刻の三作品の如き、いづれもこの點に於て宜しきを得てゐるが、とりわけ戒壇院の四天王の如くその性質の元來活動的なものに於て、よくこの條件を具へ得たのは讚嘆すべきである。又天平時代には

然るに安泰といふ條件は、その形がいかに戒壇院つても、必ずこれを具備することを要するもので、西洋に於けるその適例の一として、天かのラオコーンの像を挙げれば自ら明らかになることであらう。彫像に這般の安泰の

(一)印度の諸神。
(二)推古天皇の時、百濟人の傳へた樂

乾漆 漆に麻くづや木くづなごをまぜてかわかしたものの。

(三)相模國鎌倉町大寺長谷の淨泉寺の本尊。建高五丈。建長四年の鑄造。相好 かくかう。運慶の子 堀河天皇の頃の人。潤達 こせつていてないこと。

東大寺大佛の如き巨像も作られ、佛、菩薩、天部の像の外に、肖像彫刻の類にも亦見るべき物がある。その他伎樂の假面などにも、優秀なものが残つてゐる。



かくの如くその種類は甚だ雜多で、材料も銅、木、乾漆、塑土等種々な區別がある。以て當時の彫刻が、いかに大きな發達をしてゐたかを想見することが出来る。

天平期に次いで、鎌倉時代が彫刻の隆盛を極めた時代である。鎌倉期の作品として代表的な物の中で、殊に秀れてゐるのは、鎌倉大佛、東大寺南大門の仁王であらう。鎌倉大佛は頗る自然に彌陀の尊容を表して、慈悲圓滿の相好、内外人の等しく讚美するところである。東大寺の仁王に至つては、當時の巨匠運慶、湛慶兩人の手に成つたもので、その潤達な手法には、眞に驚くべきものがある。要するに、この期の像は天平時代のに比して稍寫實に進み、且手法の巧妙を

増進したことは事實である。而してなほ看過すべからざることは、日本的な要素の愈、多く顯れて來たことであらう。

然るに遺憾なことは、我が國の彫刻は、鎌倉時代を最後として、足利を經、徳川期に入つて漸く衰運に傾いて、その間殆ど何の見るべき物もなくなつた。けれども偶像彫刻ならぬ金屬、木、竹、甲、角の類の工藝的彫刻が新に開拓せられて、この方面に於ては實に他に匹儔を見ないまでの著しい進歩を遂げたのである。

— 藝術雜話 —

匹儔
たぐひ。

一三 石彫獅子の賦

薄田 泣菫

一
番者に問へば石工は、
木かげの夢に耽りぬこ。
入りて小暗き仕事場に、
刻みさしたる唐獅子の
圓き頸を手になでて、
誰ぞ吟ずるは、靜やかに。

朽木の棚にすゑられて、
顔くすぼるゝあら彫の
豕狗兒野の狐、
さてはを鹿のむらがり、
こは秀てたる驕かな、
日浴びて立てる獅子の影。

裂けたる岩に爪かけて、
雄々しいかるかその姿、
蠶ながく背にまきて、
見れば湧きよる春の潮、
胸はゆたかに力男が
ひきしぼりたる弓のごこ。

忿怒現ずる明王の
ひろき肩より燃えあがる
焰かながき尾は躍り、
綿毛密なる脚の裏、
落ちし野薔薇の花ふむも、
巢くへる鳥はめざめんや。

(石工妙じき心得よ)

光を知らぬ盲目の身、
いまだ前脚ふみあげて、

瞳子彫られぬ唐獅子は、
鼻かんばしき香を嗅ぐも、
花園小路みださじよ。

鑿の手またく捨てられて、
緑したゝる木のかげに、
雄姿いかに背に伏して

御苑の夏のあけぼのや、
巨人の如く立たんとき
しばし想像にふけらせよ。

二

汝の王者かたごられ
野より山より林より、
蹄の前にひざまづき、
偉なる靈魂くだりきて、

眞白き石に刻まれぬ
つぎへよ獸列りて
弱きを耻ぢて僕たれ。
眞白き石に包まれぬ。

野より山より林より、
その光輝に浴みぬべく、
大なる權威あらはれて、
野より山より林より、
王にさゝぐる燔祭の

つぎへよ獸列りて
卑き心をなげうてよ。
眞白き石に具せられぬ。
つぎへよ獸列りて
聖き火蓋を整へよ。

斑の牛と羚羊は、
進みて燃ゆる火に焼けよ。
高きほまれは汝にあり。
見よ犠牲はそなはりぬ、

ふかき痛手に甘んじて、
誇るべきかな犠牲の
羨む群ぞおろかなる。
獅子は額に鬣の

ながき流をふるはせて、
勝ミ力の權化なり、

あら起ちあがる、たかむ戦鬪ミ
伏せよ。ミ呼べば皆伏しぬ。

さかんなる哉、その令や、
人は魔のごと強からず、
値ねの源ぞ、わづらひこ

自然は死せりミここはに、
われは王者ぞ、萬有の
もだえの胸のあるじなり。

あ、運命の眩くらきをも、
胸わな、かぬ雄心の
勝利のおもひに漲れる、

眼ひらいてながめ入り、
若き勇氣に溢れたる、
この身この世に何の死ぞ。

絶ゆることなき永遠よ、
聲は喇叭の音に似たり。

われは汝の伴なりミ、
時に黙も止しはやぶられて、

たかき讚美ミ服従ふくじゆんは、

雷のごよみに現れぬ。

三

いま想像の羽たゆむ。
豊にもまた靜かなる

見れば唐獅子日を浴びて、
すがた何等の誇ぞや。

石彫ながく傳はりて、
あ、藝術は支配せよ。

榮はごならんは幾千歳。
ごはの生命ぞ汝に歸する。

—ゆく春—

一四 詩人杜甫

徳富猪一郎

(一) 杜甫は君國的詩人ミ稱すべきミ同時に、又家庭的詩人なりといふを得べし。彼の全集には、事の國家、帝王、時事に關するもの最も多く、これに次いで家族に關するもの多し。人未だその國を愛して、

(一)唐の詩人、字は子美、少陵、西曆大曆七年(西曆七五九年)歿す。

その家を愛せざるものなく、未だその君に忠にしてその家族に無情なるものあらず。彼の眼中には、國は家の擴大せられたるものにして、家は國の縮小せられたるものなり。彼の忠君愛國は抽象的に非ずして、その妻子弟妹を愛するの情を推及したるものなり。支那の詩人、上は詩經より、下は明清の諸家に至るまで、その家に多少の詩思を接觸せざるものあらず。されど支那の全史を通じて、未だ彼の如き家庭的詩人を見出す能はざるなり。その「進艇」の作を看よ。

南京久客耕南畝。北望傷神坐北牕。晝引老妻乘小艇。晴看稚子浴清江。俱飛蛺蝶元相逐。並蒂芙蓉本自双。茗飲蔗漿携所便。瓷罍無謝玉爲缸。

支那四川省の首府。

これ成都に於ける浣花草堂生活中の消息なり。その一家和樂の状は、千載の下なほ活躍す。夫婦小艇に乘じ、稚子清江に浴す。艇上の蛺蝶は俱に飛び、水邊の芙蓉は蒂を並ぶ。先生貧なりと雖も、その樂み

贏得

決して貧ならざるなり。人類ありて以來、詩人多からずとせず。しかも彼が如き清福を贏得たるもの、それ幾許かある。その江村卜居の作中句ありいはく、老妻畫紙爲棊局。稚子敲針作釣鉤。貧家の活計



杜甫畫像

も、ここに至りて寧ろ羨むべきを見るなり。若しそれ彼が「春望」の五律の如き、

國破山河在。城春草木深。感時花濺淚。恨別鳥驚心。

烽火連三月。家書抵萬金。白頭搔更短。渾欲不勝簪。

いかなる鐵石の心腸を有する者も、誦し來りて黯然たらざるものあらし。詩として絶調なり。情として絶調なり。家書抵萬金の一

倦々

句は、眞に彼の胸奥より湧出てたるなり。同時に「遣興」の詩あり。

驥子好男兒。前年學語時。問知人客姓。誦得老夫詩。世亂

憐渠小。家貧仰母慈。鹿門携不遂。雁足繫難期。天地軍塵

滿。山河戰角悲。倘歸免相失。見日敢辭遲。

彼の心は實にこの稚兒に倦々たりしなり。又「元日示宗武」の作にい

はく、

汝啼吾手戰。吾笑汝身長。處處逢正月。迢迢滯遠方。飄零

還泊酒。衰病只藜床。訓諭青衿子。名慙白首郎。賦詩猶落

筆。獻壽更稱觴。不見江東弟。高歌淚數行。

前詩は至徳二載の春、即ち彼が四十五歳の作、後詩は大曆三年の

正月元日、即ち彼が五十七歳の作なり。僅かに父の詩を誦するを學

ぶ驥子も、今は一個の青年となりぬ。吾人はこれを讀んで、いかに彼

がその子に愛着したるかを知るなり。而して又その同胞に眷々た

るかを知るなり。

彼の愛はその妻子のみならず、實に弟妹に及べり。彼の「同谷縣七

歌」中の第三首と第四首とは、弟と妹とを題目とせり。有弟有弟在遠

方。三人各瘦何人強。又いはく、有妹有妹在鍾離。良人早沒諸孤癡。

その他集中に散見する彼が同胞を懷ふの詩、枚舉に遑あらず。彼や

眞に家庭的、若しくは家族的詩人たるに愧ぢざるなり。

——杜甫と彌耳敦——

一五 萬葉集の歌

一 長歌

(一) 吉野宮に幸ませる時

安見しし吾が大君、

吉野川瀧つ河内に、

柿本人麿

神ながら神さびせすこ、

高殿を高知りまして、

(一) 萬葉集卷一
安見しし

上り立ち國見をすれば、
 山神の奉る御調こ、
 秋立てば紅葉かざせり、
 大御食に仕へまつると、
 下つ瀬に小網さし渡す、
 神の御代かも。

た、なはる青垣山の、
 春べは花かざし持ち、
 ゆふ川の神も、
 上つ瀬に鵜川を立て、
 山川も依りて仕ふる

反歌

山川もよりて仕ふる神ながら、
 たぎつ河内に船出せすかも。

聖武天皇紀伊國に行幸し給ひし時

山部 赤人

安見しし吾が大君の
 雑賀野ゆ、

常宮と仕へ奉れる
 そがひに見ゆる

(一) 萬葉集卷六、
神龜元年十月
五日。

(二) 今の和歌山市
の南に連る一
帯の平野。



柿 本 人 麿

— 岩佐勝以筆 —

さわらび
志貴皇子
いはそよく
たるみの上
のさわらび
のもえいつ
る春になり
にけるかも
若菜
山部宿禰
赤人
あすからは
わかなつま
んとしめし
野にきのふ
もけふも雪
はふりつゝ

(一) 萬葉集卷五。

奥津島清き渚に、

風吹けば白波さわぎ

潮干れば

玉藻刈りつゝ

神代よりしかぞ

貴き玉津島山

反歌

和歌の浦に

潮満來れば

渦をなみ

葦邊をさして

田鶴鳴き

わたる。

山上憶良

右和良妣

志貴皇子

石灘ま見えよ乃右和良妣の言要出春

余成菜穂

いそりくそらみのうつれくもこい

しそいつるまれよかあよけもうも

若菜

山部宿禰赤人

従明日者春菜持標跡標と野ふ昨日

色今日ぬ雪次布利言

あしきつゝはわがほしと三々

あききつゝはわがほしと三々

(一) 子等を忍ぶ歌

瓜食めば子ごもおもほゆ。 栗食めばましてしのばゆ。
いづくより來りしものぞ 眼交まなまじにもこなかゝりて、
安寝しなさぬ。

反歌

白金も黄金も玉も何せん
まされる寶子にしかめやも。

二 短歌

柿本人麿

(一) 萬葉集卷一。
東の野にかぎろひの立つ見えて
かへり見すれば月傾きぬ
(二) 萬葉集卷七。
足引の山河の瀬の鳴るなべに
ゆづきが嶽に雲立ちわたる

山部赤人

(一) 萬葉集卷八。

(一) はるの野に葦摘みにさ來しわれぞ
野をなつかしみ一夜ねにける

笠金村

(二) 萬葉集卷三。

(二) もののふの臣の男子は大君の
まけのまにま聞くといふものぞ

大伴家持

(三) 萬葉集卷十九。

(三) ますらをは名をし立つべし後の世に
聞きつぐ人も語りつぐがね

(四) 萬葉集卷十八。

(四) 春の野に霞たなびきうらがなし
このゆふかげに鶯鳴くも。

一六 古文學に見えた祖先の面影

奈良時代以前の重なる文學は、古事記、日本紀の中に在る百八十

餘首の歌、延喜式の中に在る祝詞である。祝詞は神に祈る詞であるが、その中最も文學的價值のあるものは、大祓詞と祈年祭詞である。祝詞を見るに、我が國民が罪穢を忌み、清く直きを愛したことに、神を敬ひ平和を愛したことがわかる。

古事記、日本紀の歌の例として、たゞ一つ日本武尊が臨終の御歌を引かう。

いのちの 全けん人は

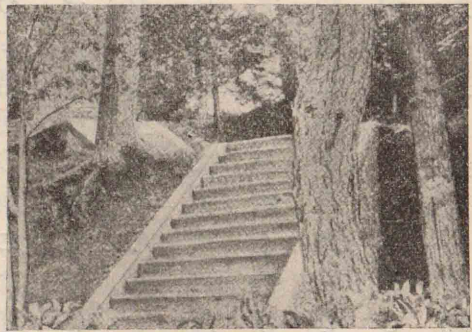
たゝみこも 平群の山の 隠白禱が葉を

うずに挿せ その子

これは尊が伊勢の能褒野で薨りたまはんとする時、遙かに故郷の大和を思ひやつて歌はれた思國歌である。歌の大意は、我は今病のために、旅の空に寂しくはてるのであるが、それにつけても故郷の汝等を思ふの情に堪へぬ。おはれ故郷の命全く身の健ならん人

よ、むかし我が汝等々にも取つてかざして遊んだあの平群の山の隠白禱の葉を髪飾として、楽しく遊べよかし。我が愛する故郷人よ、こいふことであらう。

旅路に悩み、死に臨んで故郷をしのぶのは人情の自然で、珍しくもないが、毒氣に中り、恐しい苦悶を重ねて死ぬる間に、遙かなる故郷人に語を寄す。命全けん人は、平群の隠白禱をかざし、陽氣に遊んで人生を楽しめかし。こいはれた御心持はごうであらう。この樂天的、積極的、向上的、光明的な勇ましい氣象は、いかにも有難いものではないか。この有難い氣象、日本民族の積極的、光明性が、佛教などのお蔭で濕つほく陰性化、消極化せられたかと思ふに、残念でならぬ。



日本武尊能褒野陵

日本武尊はいろ／＼な點で、大和民族の固有性を備へて居られた方であつた。性質は極めて聰明で、そして武勇は絶倫であつた。熱したら矢も楯もたまらぬ多血性で、兄君を掴みひしいで、薦に包んで投棄てる。こいふ亂暴をされるが、それでゐて、君父の命には従ふ。こいふ優しいところがあつた。東西の兇賊を手もなく平げられる武勇があつて、それで姿はこいふと、女装すれば川上臯帥の目をも欺く美容があつた。人を信じて、群る夷の間に直往して火攻に逢ふ。劍でその火を薙返して夷を鑿にする。伊勢では、熊襲を漸く平げた私に、すぐ蝦夷征伐の勅命のあるのは、父帝が死ねよとの御心でありませうか。と叔母命に泣いて語られたが、やがて涙ををさめて夷を平げられる。死なうとこいふ間際に、達者な人は遊び樂しめと勧められる。色々な積極的性質の面白く調和した趣、實に愉快な御性格ではあるまいか。

日本武尊は世に在した時は、自ら我が心常には空よりも翔り行かんと思ふ。こいはれたが、薨れまして後は、白鳥となつて、威勢よく美しく天に翔つて行かれたと申すことである。隱白禱に白鳥。私はこの二つが大和民族の堅實な性質と、清潔、優美を愛する性質と、足許を固める着實性と、高きに憧れる向上心を表す標章として、實にふさはしいものと思ひ、さうしてこれが日本武尊といふ上代の代表的英傑に繋がつてゐることを面白く思ふ。日本の國民性が凝固つて日本武尊となつたのではないかと思ふ。

次に奈良時代の文學を代表すべき作物は、古事記と萬葉集である。古事記は神代の古昔から推古天皇に至るまでの言傳を筆記した。萬葉集は奈良時代の歌人の作を中心とした上代の歌集である。さうして二つともに昔の日本民族の純な面影を見るべき古文學の寶典である。古事記の趣を示す一例として、須佐之男命が高

天原に上られた時に、天照大神が命を待ちつけて詰問せられる一節を引かう。

「山川悉に動み、國土皆震りき。ここに天照大御神聞驚かして、我が那勢の命の上り來ます由は、必ず善しき心ならじ。我が國を奪はんと欲すにこそと詔り給ひて、即ち御髪をこき御角髪に纏かして、左右の御角髪にも、御鬘にも、左右の御手にも、各八尺の勾瓊の五百津の美須麻流の珠を纏持たして、背には千入の靱を負ひ、比良には五百入の靱を附け、又いつの竹靱を取佩ばして、弓腹振立てて、堅庭は向股に踏みなづみ、沫雪なす蹶散かして、いつの男建び踏建びて、待問ひ給はく、何故上り來ませるご問ひ給ひき。」

大意は、須佐之男命は山川國土を震動させて、天照大神御領の高天原に上つて來られた。大神は聞し召し驚かせられて、弟の命が恐

しい權幕で上つて來たのは、きつご善意ではあるまい。察するに我が國を奪はんの下心であらうご仰せられて、早速凛々しい男裝に改めさせられ、髪をこいて角髪に結び、左右の御角髪にも、御鬘にも、左右の御手にも、玲瓏燦爛たる勾玉を緒に通したのを纏うて、輝くばかりに装はせられた。なほ武器には千本入、五百本入の靱を前後につけ、左手の臂には立派な靱を佩び、弓腹を振立てて、堅い庭に向股まで踏みぬかんばかり力足を踏張り、土くれをば沫雪の如く蹶散らかして、御稜威あたりを拂ふ御武者ぶるひゆゝしく、居丈高に立ちただかつて、命の見えるを待ちつけて、何故の入國ぞご問はせられた。ごいふことである。

土から掘出したやうなうぶな趣ご、鐵のやうな強い力ご、花のやうな優しい美しさが、微妙に調和してゐるやうに思はれる。天照大神の氣高い、勇ましい御姿が、雄壯剛健な大文字の中に躍動して

ゐるやうに思はれる。
我等の祖先の面影の古文學に見えた趣は、まづこのやうなものであつた。
——五十嵐力作文三十三講による——

一七 清文寸錦

四季

清少納言

春は曙やうやう白くなりゆく山ぎはすこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜月のころはさらなり、闇もなほ螢とびちがひたる。雨など降るさへをかし。

秋は夕暮。夕日花やかにさして、山の端いと近くなりたるに、鳥のねごころへ行くとして、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをかし。日

入りはてて、風の音、蟲の音などいとあはれなり。

冬は朝雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜などのいと白き、またさらでもいと寒き、火など急ぎおこして、炭もてわたるもいとつきづくし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃、火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

木の花

梅は濃くも薄くも、紅梅、櫻の花びら多きに、葉色濃きが、枝細くて咲きたる。藤の花、しなひ長く、色よく咲きたる、いとめでたし。卯の花は品劣りて、何となければ、咲く頃のをかしう、杜鵑の蔭に隠るらんを思ふに、いとをかし。祭の歸さに、紫野のわたり近きあやしの家ども、おごるなる垣根などに、いと白う咲きたるこそをかしけれ。青色の衣の上に、白き單がさねかづきたるやうにて、いとをかし。

四月の晦、五月の朔などの頃、ほひ、橘の葉のいと濃く青きに、花の

(一)山城國愛宕郡大徳寺邊の舊名。

いと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなごは、世になく心あるさまにをかし。花の中より實の黄金の玉かご見えて、いみじくきはやかに見えたるなご、朝露に濡れたる櫻にも劣らず。杜鵑のよすがごさへ思へばにや、なほ更にいふべきにもあらず。

梨の花、世にすさまじくあやしきものにして、目に近く、はかなき文つけなごだにせず。愛敬おくれたる人の顔なご見ては、たごひにいふも、げにその色よりして愛なく見ゆるを、もろこしに限りなきものにて、文にも作るなるを、さりごも、あるやうあらんごて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしき匂こそ、心もごなくつきためれ。さてなほいみじうめでたきことは類あらじと覺えたり。

桐の花、紫に咲きたるはなほをかしきを、葉の廣ごり、様うたてあれごも、又他木ごもごひごしう言ふべきにあらず。唐土にこごごごしき名つきたる鳥の、これにしも住むらん、心ごごなり。まして琴に

さりともある
やうあらん

うたて

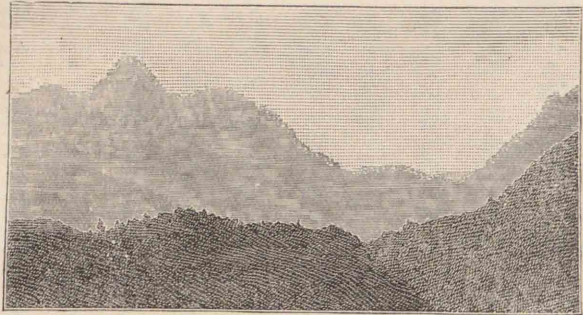
ことごとくし

作りてさまごとくなる音の出でくるなご、をかしごは世の常にいふべくやはある。いみじうこそめでたけれ。

木のさまごにくげなれご、樗ちくまの花いごをか
し。枯ればなに様ごごに咲きて、かならず五月
香 五日に逢ふもをかし。

香 爐 峰

爐 雪いと高く降りたるを、例ならず御格子ま
ゐらせて、炭櫃に火起して、物語なごして集り
峰 侍ふに、少納言よ、香爐峰の雪はいかならん。ご
仰せられければ、御格子あげさせて、御簾高く
卷上げたれば、笑はせ給ふ。人々も、皆さるごご
は知り、歌なごにさへうたへご、思ひこそ寄らざりつれ。なほこの宮
の人には、さるべかかんめり。ごいふ。



——枕草子——

(一)文學博士。東京帝國大學教授。群馬縣の人。

自然の色彩 [自修文]

松本亦太郎

(Ether)

太陽の光線が、直接或は間接に自然の事物に當り、それから反射した光線が我々の眼底を刺戟すること、その時始めて自然界の色彩が現れる。物理學者は色彩はエーテルの波動であること説くが、波には長さの變化と幅の變化こそあれ、色彩の區別はない。色彩はエーテルの波動に應ずる心の所産であつて、直ちに心の現象とはいはれないが、心を離れて色彩は現れるものでないから、一方からいへば、自然界の色彩は、我が心の反映したものと謂ふことも出来る。自然の色彩に様々な表情の存するのは、畢竟それが心の所産であるからである。自然界に現れる色彩は千差萬別であるが、これに對する心持の方から見ると、すべての色彩をまづ二つに大別することが出来る。即ち温暖の心持を生ずる色彩と、寒冷の心持を生ずる色彩であつて、畫家はこれを温暖色及び寒冷色と稱へて居る。

寒冷色の中心は青であつて、青に近似した色は、青緑から紺青に至るまで、皆涼しい心持を生ずる。温暖色の中心は橙黄であつて、これに近似した色は、

暗赤色から黄緑に至るまで、皆暖な心持を生ずる。

日本やイタリーあたりでは、晴天には大空は青々として眞に美しい。然るにいづれの國民もかゝる青々とした空を戴いて居るといふわけにいかない。北歐諸國では、晴れて居る時でも空氣が透明でなく、空は灰色になつて居る。勿論多少の青みはあるが、冴え／＼とした青色ではない。鉛のやうな色をして居る。隨つて晝でも、夜でも、天體の光が朦朧として居る。我々日本人は、イタリーの風色を餘り美しいとは思はないけれども、北歐の人がイタリーの自然を讚美して已まないのは、彼等が日常青天白日の美を見ることが稀だからである。空の青く見えるのは、空氣の中を日光が透るからである。遠山の青いのも、重疊した空氣を透して山を見るからである。青は浮動の心持を生ずるから、山も遠くなるに輕妙に見える。大空の色は飽和の度の強い青ではない。濃い青を日光を以て薄くしたのである。あの淡青、即ち空色は靜かな色であるが、喜悅の色である。最も濃い青は深い海の表面に於てこれを見ることが出来る。それは即ち紺青である。

太平洋、印度洋上の航海は、紺青の波の上を渡り行くのであるが、極めて濃厚な紺青は、その深さ一萬七八千呎もある大洋の水面に於て發見することが出来る。紺青の水より雪白の波の花の咲くのも不思議であるが、咲いた花が忽ちに紺青に染められて、雪白と紺青の争は限りもなく繰返されて、両色彩の活躍する状は、甚だ目覺しく、航海中の一つの慰である。紺青はいかにも美しいけれど、沈鬱の趣があつて、一種の凄味がある。ギリシヤの内海やイタリーの沿岸の水のやうに海が淺くなれば、紺青は稍淡くなつて、瑠璃の寶玉を液化したやうに爽快になり、更にスキスの山間(1)ルツェルンの湖水となれば、藍青は緑を帯びて、恰も翡翠(2)の玉を水に化したやうになつて、色は靜かだが、沈鬱の趣は薄くなる。ライン川の上流などになると、緑色は益、勝つて、青色を壓するやうになる。尤も河の水は礦物性或は植物性の溶解物があつて、種々に着色せられるが、概して水は深いから淺いに移るにつれて、紺青から青を経て、緑に移るのである。人間は眼界が狭く、一局部のものしか見ない。しかもその局部には種々な色が現れて居るが、地球の表面の大部分を形成して居る水の色が青で

(1) Turan.
スキス中央の湖。ウイグルの傳説を以て名高い。
翡翠
綠色の礦物。支那に産する。

主調
おもな色。

(2) びるがほのい。

(3) 京都府葛野郡嵯峨村の西北。
(4) Red Sea
アラビヤとアフリカの間。
もいふ。
(5) Sinai.
紅海の北海岸シナイ半島に在る。
(6) Jehovah.
イスラエルの民族の神の名。
(7) Israel.
ノロモン(ユダヤ)の死後、ユダヤ國から分離して別に一國を建てた。その時旅行の旅行。

あり、さうして又天空の色が青であるのだから、天地の色は青が主調になつてゐると言はなければならぬ。空に見える所、水の動く所、人間の心を沈靜させる働が斷えず行はれて居る。花の中にも、あやめ、紫陽花、あめふり草、野生の朝顔など、いづれも涼しく、靜かに人の心を休息させる色である。寒冷色の青と正反對なのは橙黄色である。これは暖い色であることに、人の心を大いに發揚させる。太陽から發射する色は、最も光輝ある橙黄色である。秋の夕陽が西山に没しようとする際の空の色は、太陽から出る黄金色の本性を最もよく發揮する。例へば、東海道で見る富士の背後に日の没する際や、京都の愛宕山の後に日の入らうとする時の空は、全く金箔の空と化し、山嶽の碧色と相對比して、その見榮(1)が一層である。私の心に最も強い印象を残したのは、紅海の上から眺めたシナイ山の夕陽の景色であつた。シナイ山は絶頂から黄金の光を浴び、山の中腹に懸つた雲は、黄金の神火が燃えるやうに見え、莊嚴いはん方なく、炎の中にエホバの聲が聞えたとか、暗中火の柱が立つてイスラエルの民の沙漠旅行を先導したとかいふやうなユダヤの神話は、あゝいふ景色か

(1) Athens, ギリシヤの首都

(2) Apollo, ギリシヤ神話で太陽を神化したもの

ら湧出したのではあるまいかと思はれた。太陽の光線も、日本ではさまで強烈ではないが、ギリシヤの(1)アゼンス附近の夏の太陽といつたら、朝から偉い光輝を放つて、その光が大理石質の地面に反射する時は、眼に痛みを覚える。煤色(2)の眼鏡を掛けずに、アゼンス附近を旅行するのは、眼の爲に危険であるといはれて居るくらゐである。ギリシヤ神話で、太陽の光線をアポロの射出す矢であるとしたのも、成程と頷かれる。

太陽の光が月や星に反映する時は、餘程趣の違つた色が出る。太陽は吾人の眼に映ずる限りに於ては、熱烈な黄金色となるが、月に映じた時は柔く、幾分冷かな色になる。地平を出る時の月は、空氣が汚濁してゐるので、銅色を帯びて居るが、段々高くなつたのを、澄渡つた空氣に透して見ると、空氣の青色が加つて來るので、黄金に銀を混ぜたやうに稍蒼白になり、冷靜の趣を生じ、人をして沈思せしめる。天體天象の色としての黄金色は、その發顯の規模が大きく、種々に人の心を躍動せしめるのであるが、小規模に於ては、地上の花鳥の色となつて人を楽しませる。冬の蜜柑畑、春の菜種畑は何人が眺めても怡悦(3)を

怡悦(3) よろこび

寒暄 寒暖に同じい、非情の生物

人類や動物などの有情の動物に對して植物などない

(1) 東京上野 (2) 嵐山

感ずる。その他、(4)連翹、山吹、月見草、黄菊、水仙の類、四季の花としていづれも優しい懐かしい趣がある。南瓜、胡瓜の花は胡蝶の舞ふ姿にも野趣があつて面白い。

紫紺と橙黄の中間に位して居るのが、綠色及びその附近の色である。綠色は寒暄(5)相和し、興奮沈靜相合し、いはゆる折衷的の性質を有する色である。地上に於ける非情の生物の有する特色であつて、天にはない色である。人間がいつまで眺めて居つても飽きない色は綠である。嫩草や、若葉は大抵帶綠黄色で始るが、日を経るに随ひ綠色となり、終には暗綠色となる。フランスあたりでは、夏の盛でも木の葉は帶黃綠色で、柔く生々しいが、日本や英國では木の葉は忽ち暗綠色となり、自然の景色が硬くなる。若葉の萌出る時は、誠に美しい。氣がのび／＼する。五月初の若葉の景色は、四月初の花の景色よりも、實は遙かに趣が深い。(6)東台の新緑、京都東山の新緑、宇治の新緑、嵐峽(7)の新緑を訪うて楽しむ人の割合に少いのは、花見客の多數が、自然の風色を楽しむ心をもつて居らぬ事を示して居る。眞に花の色を楽しむ人なら、新緑にも樹下に大騒をし

(J) Bois de
Boulogne.
パリ市の西郊
(J) Ringsten.
聖靈の降誕を
記念する祝節
日。聖靈降臨
祭。復活祭の
後五十日に
當つて、一週
間引續いて行
ふ。

御苑
御所のお庭。

介在す
はさまれて居

てよいはずである。佛獨あたりでは、花に對しては餘り騒がないが、森林の色を樂しむことは随分盛である。巴里のボア・ド・ブローロンの初夏の滴る如き新緑が、都人士の心を引附ける事は、實に大なるものである。フイングステンは新緑の到来を祝する祭である。又英國や米國では、面積の廣大な芝生を造る事が實に巧で、その國民が綠色趣味に富んで居る事をよく示して居る。日本の三都中で、市街に樹木の最も多いのは東京である。殊に高臺の光景からいへば、東京は樹木の都といつてもよい。京都の周圍には美麗な山色はあるが、御苑を除いては、市中には樹木は乏しい。大阪は市の内外ともに樹木は甚だ少い。工業の都會が自然と隔絶するのは已むを得ないが、自然から餘り隔離すること、人の心は俗了する。大都會に樹林鬱蒼たる大公園を現出せしめる事は、都人士の心身に極めて健全な感化を與へるものである。

暖い色と寒い色の中間に介在して居る點に於て、緑と關係が似て居るが、色の性質に於てこれと正反對になつて居るのは紫の色である。紫は太陽の分光色中にはないが、自然の花の色としては可なり澤山にある。紫の中で、紺青に近

(J) Queen
Victoria.
西曆一八一
九年
一年

いものと、赤に近いものがある。牡丹、芍薬、躑躅などの花は赤に近い方で、杜若、菖蒲、菫、藤などの花は紺青に近い。木蓮の花はちやうど桔梗と赤の中間にある。人間に培養せられた朝顔の色は差別も甚だ多いが、大抵赤と青の中間に變化して、紫のものが最も多數を占める。總じて紫の色は人を興奮させると同時に、人を沈靜させる。派手なるが如く、おこなしきが如く、両様の趣が備つてゐて、人を悩ます色である。薄紫になると、優美の情趣が加つて来る。紫色に光輝が加ると莊嚴な色になる。ゲーテが「神がすべての人に審判を下す世界の末日の色は、必ず紫色であらう。」と言つたのは、その莊嚴の趣から考へたものであらう。ヴィクトリヤ女皇は紫を好み、女皇の大葬の日は、ロンドン市中紫の幕で張詰められた。紫は王者の色といふ事も出来る。

色の中で、人の心を最も強く興奮させるのは赤い色である。緑は非情の生物が外面に發顯する色であるが、赤は有情の生物の身體内に流動する主な色である。しかし赤は又天象の色として、或は植物の色として、頗る著しい色である。火山が爆發して天に火の柱を立てる時などは、赤も随分凄じいものになる。何

(1) Mireu.

(2) Alps.
イタリヤの北
方を限つて居
る一帯の高山
脈。

人も知つて居るのは、夕焼の現象である。夕焼は空や雲が赤くなるのであるが、夕焼の中、一種特別のものがある。私は曾てスキスの山奥、ミュルレンといふ所に夏旅行をしたことがあつた。谷を隔てて、前面にはユングフラウ山が永久の雪を被り、山腹の所々に氷河がある。目没して四面暗くなる頃、時どき、地平線下の太陽がこのユングフラウの雪を照らすことがある。その時は闇の空に眞紅の山嶽が現れ、實に莊嚴の趣がある。山が紅になると、對比の働によつて、背景の空が暗青色に見え、山の紅は益、鮮になる。これはアルプ山の紅潮と唱へて、有名な現象であるが、天氣の工合が餘程よくないと、容易に見られない光景であつて、自然界に於ける赤色の發顯として、頗る大規模のものである。

(3) Rocky Mountains
米國の西部を
南北に連亘す
る大山脈。

通例地上に於て眺めることの出来る赤い風色は、秋の紅葉である。碓氷峠、日光山あたりの紅葉は、満山燃えるが如くなつて美しい。京都附近の紅葉も、色が冴えて随分美しいが、箱庭的小風色が多い。私は或年の十月の初に、ロッキーマウンテンの紅葉を見た事があつた。ロッキーマウンテンには、それこそ實に大きい山

が突兀として天に聳え、雪を戴いて、氷河などが流れて居る。裾の山々溪々の木の葉は、眼の達する限り紅に染められ、汽車はいくら走つても紅葉は容易に盡きなかつた。さうして所々清流激湍があつて、實に美しかつた。

花として咲出づる紅には淡紅のものが多く、深紅は濃厚に過ぎて、これは廣い面積に擴げると、比較的味はひが乏しくなるが、淡紅になると、喜悅の情があつて、味はひが深くなる。櫻の花でも、桃の花でも、紫雲英の花でも、櫻草でも、民衆の狂喜するのは皆淡紅である。尤も小さい花なら深紅でもよい。罌粟の花とか、ダーリヤの花とかいふやうなものは美しい。牡丹なども一二輪深紅で咲いて居るのは見榮のするものである。

——渡り鳥日記——

(1) Dahlia.
松本亦太郎著
日本及び歐米
各地の自然米
風俗の美術等
に關する隨筆
紀行實業之
日本社發行

一八 春秋の争

津田左右吉

自然界は、平安時代の人にとつては、人世の歡樂を助けるものとしてのみ價值があつたのである。換言すれば、彼等は自然界を以て

人の翫弄すべきものと考へてゐた。奈良時代の人は單純な小兒らしい態度で自然の美しい色と聲を愛し、或は自然を我が氣分に融合させたのであつた。然るに平安時代の貴族にとつては、花も鳥も彼等に翫弄せられる爲に、咲きもし鳴きもしなければならぬのであつた。だから花も月も人の見る爲のものときめて置いて、花を散らす風には吹くなと命じ、月を隠す雲には去れよといひ、傲慢な態度で自然を驅使しようとする。さて翫弄せられるものは、小さいもの、美しいものである。現に「なにもく、小さきものはいと美し。」枕草子、うつくしきもの」といつてゐる。雄大、傀偉、森嚴、凡そその威力の人を壓し、その活動の人を恐れさせるものは、もごより翫弄すべきものでない。自然界に於て優美な羸弱な方面のみを愛するといふことは、奈良時代の人からすでにさうであつたが、平安時代になると、貴族等の氣風が益羸弱になることにも、それが一層甚だしくなつ

たのみならず、かういふ特殊な理由も加つてゐる。

特に狹隘で優美で且小規模である平安京の山水を天地として、それより外には出ることを好まなかつた當時の都人士は、山川の遊覽を興あるものとした奈良時代の人とは違つて、平素見なれてゐる小さい美しい自然界と少しでも様子の變つた光景に接すると、殆どその前に戦慄するばかりであつた。枕草子開卷第一に「春は曙。」と書出した一節を見るがよい。すべてが小さく美しく優しいではないか。恐しきもの。」につるばみの笠。やけたる所。みづぶき。菱。髪多かる男の頭あらひてほすほ。栗のいが。のみを擧げたのを見ること、恐しいものさへ小さいものばかりであるのに驚かれる。古今集以下の選集を見ても、家集を讀んでも、その題材となつてゐるのは、花鳥の色と音でなければ、和い月の影、優しい蟲の聲々である。萬葉に見えるほごな山水の眺も、殆どなくなつてしまつた。その歌が春秋

(一)源氏物語賢木の卷

に多くして夏冬に少いのも、美しく優しい眺が春秋に多いからである。(和泉式部に)世の中は春と秋になしはてて夏と冬のなか
らましかば、といふ歌がある。夏ならば「階の下さうの薔薇びけしきばかり
咲きて、春秋の花ざかりよりも、しめやかにをかしき」(源氏(一)眺か、冬な
らば「雪高う降りて今もなほ降るに、五位も四位も、色うるはしう若
やかなるが……紫の指貫も雪にはえて、濃さまさりたるを着て、袖そで
の紅ならずば、おごろくしき山吹を出して、からかさかさをさしたる」
〔枕草子〕美しさをのみ賞した。野分のでさへも、源氏の野分の卷や、枕の
野分の又の日記のの一節を見るに、すさまじいよりは寧ろ美しい。
平安時代の人は、何物に就いても優美な點をのみ見出してゐる。
ここに春秋の争といふ事がある。これは萬葉からすでに見えて
ゐるここで、かの額田女王の歌には秋を選んである。平安時代にな
つては、伊勢物語に

雁なきて菊の花さく秋はあれど

はるの海べにすみよしのはま

の歌があるが、選擇の主意が明らかに説いてない。貫之は

春秋(一)に思ひ亂れてわきかねつ

時につけつゝうつる心は

とごちらにも都合のよいことをいつてゐる。承香殿そかうでんのとし子の

おほかたの秋(二)に心をよせしかど

花見るときはいづれともなし

もほゞ同様で、一應は秋に心を寄せたといふものの、その理由が明

らかでない。たゞ讀人不知の

春(三)はたゞ花の一重にさくばかり

ものあはれは秋ぞまされる

に至つて、物のあはれの一轉語を下して、秋に旗を擧げた。あはれこ

(一)(二)(三)ともに拾遺集雜の部

いふからには、春よりも秋に人の心が動かされるところが深いといふのであらうが、それは何故であらうか。源氏の薄雲の巻にその主人公が

歳のうち、行きかはる時々の花紅葉、空の氣色につけても、心のゆくことも侍りにしがな。春の花の林、秋の野の盛を、とりぐに人争ひ侍りける。その頃の、げにこ心よるばかりあらはなるさだめこそ侍らざなれ。唐土には春の花の錦に如くものなしといひ侍るめり。やまこ言の葉には、秋のあはれを取立てて思へる、いづれも時々につけて見給ふに、目移りて、えこそ花鳥の色をも音をも辨へ侍らね。狭き垣根の内なりとも、そのをりくゝの心見知るばかり春の花の木をも植渡し、秋の草をも掘移して、いたづらなる野邊の蟲をも住ませて、人に御覽ぜさせんと思ひ給ふる。

こいつた話がある。これにも春秋をいづれとも判断してゐないが、

目移る

「秋のあはれの成語を引いてゐるのに、秋草の色と蟲の音を考へてゐることを注意しなければならぬ。春を飾る花鳥の色と音に對して、秋の特殊な情趣を示すこの風物が、物のあはれを一入深く感じさせるものだ」とすれば、かの歌に、春より秋を選んだのは、爛漫たる櫻の花の華やかなよりは、寧ろ萩やをみなへしのひたすらに優しく、小さく、女らしい弱々しさのあるのに心がひかれたのであらう。春を花の一重に咲くばかりとして、それよりも秋を取つたのだから、千草の花の種々なのが、一層美しい故にも解せられるが、その千草の色には、春の花に求められない優しさ、弱々しさがあるのである。さうしてここに平安時代の人の嗜好が現れてゐるのではなからうか。同じく秋をこつても、華やかな紅葉を手折らうとする額田女王とは、理由の違ふところが看取せられる。さて美しい小さい眺を愛する自然の傾向として、觀察は頗る細

きはやか
けざやか

かくなつた。桃の木の若枝の多く差出たのを、片つ方は青く、今片枝は濃く艶やかにて蘇枋すぼのやうに見えたる。枕まくら、草子くさこといひ、いりはてぬる山際に光のなほ留りて明う見ゆるに、薄黄ばみたる雲のたなびきたる。同上どうじょうといひ、明離るゝほどの黒き雲のやうく、白うなりゆく。同上どうじょうといふなどの色の觀察、又は、おほこなぶらはまゐらで、長すびつにいそ多くおこしたる火の光に、御几帳の紐のいそ艶やかに見え、みすの帽額ぼうがくのあげたる鈎かぎのきはやかなるも、けざやかに見ゆ。同上どうじょうといひ、有明の月のありつゝも、さうちいひて、さしのぞきたる髪のかしらにもより來ず、五寸ばかりさがりて、火こもしたるやうなる月の光。同上どうじょうといふ光線の描寫などの精緻な筆つきを見るがよい。細かい點をいふと、蚊の羽風さへ清女の筆にのぼつてゐる。これ等は宇津保に、朝の霞、緑の衣なり。夕の雲、黄なる錦なり。春日詣かすかひゆきなどこある漢文直譯流のものは違つて、親切な實際の觀察から

來たものである。源氏の風景の描寫は枕まくらほど纖細ではないが、その代りいかにも生きてゐる。よくその風韻を寫し、全體としての情趣を髣髴せしめる手腕は、又格別であるといつてよい。たゞ清少納言は紫式部のやうに人情の微を穿つ眼がなかつただけ、目に見えるものの觀察は甚だ鋭敏である。それはこの女一個人の特長ではあるものの、やはり時代の生んだものであることはいふまでもない。

——文學に現はれたる國民思想の研究——

一九 花と蝶

藤井 高尚

花

春くれば、咲かざりし木草の花もあまた咲きいづる中に、それかれこかずまへいふ限りはさらなり、名も知らぬも、をかしう見ゆるは、をりからなめりあるはいそよく晴れたる朝日の、のごかなる影

あだし時

にほひあひて、ひときは美しう、あるは霞める月の影の心にくきに、ほのく見ゆるがいひ知らぬなど、あだし時にかゝらんやは。さるをかしき折に、また類なき櫻の咲きいでたるよ、いかでかはなめならんごぞ。

蝶

莊周が夢のうち(一)に身をかへて胡蝶となりしといへるは、もごよりそら言ながら、をかしきふるごごとて、昔より歌にも文にも作りあへり。さるは、胡蝶といふもの、見る目もいと美しく、名さへにくからぬ故ぞかし。蓑蟲などになりたる夢物語ならば、かゝらんやは。花園にはじめは三つ四つと數ふるばかり稀に見えしも、いづくよりか來つらん、あまたになりて、空にこび、木がくれをゆく。あしたには露にぬれて小さき羽も重きにやあらん、立ちかねて、なほ花びらにすがりて眠りゐたるに、風のさと吹きくれば、驚きておのれも亂れ

(一) 支那周代の蒙
の人。孟子と
同時代。孟子と
莊子といふ。

飛び、ゆふべにはねごころを争ふにやあらん、ここかしこの花にすだきて、たちみひまなきがをぐるやうに見ゆるなど、いとをかし。ましてやんごとなきわたりの前栽の花にすみて、玉簾近くこびありきたらんは、あひあひて、ひたひつきも羽衣も、ひときはあてに美しくぞ見ゆらんかし。

— 松屋文集 —

二〇 御堂關白

花山院の御時に、五月下つ闇に五月雨も過ぎて、いとおごろおごろしくかきみだれ雨のふる夜、帝さうくしくや思し召しけん、殿上に出でさせおはしまして、遊びおはしましてけるに、人々御物語なごし給ひて、昔恐しかりける事ごもなご申させ給へるに、今宵こそいとむづかしげなる夜なめれ。かく人がちなるにだに、けしき覺ゆ。まして物離れたる所なごいかならん。さあらん所に一人いなんや。

さうくし

むづかしげ
けしき覺ゆ

(一)藤原道長
さる所おはし
ます
(二)藤原道隆
長の長兄
道
(三)藤原道兼
長の仲兄
道
便なき事

にがむにがむ

子四つ

(四)道隆

と仰せられけるに、「え罷らじ。このみ申し給ひけるを、入道殿は、いづ
くなりとも罷りなん。」と申し給ひければ、さる所おはします帝にて、
「いと興あることなり。さらば行け。」道隆は豊樂院道兼は仁壽殿の塗
籠、道長は大極殿へ行け。と仰せられければ、よその君達は、便なき事
をも奏してけるかなと思ふ。又承らせ給へる殿原は御氣色變りて、
益なしと思したるに、入道殿はつゆさる御氣色もなくて、私の従者
をば具し候はじ。この陣の吉上まれ、瀧口まれ一人昭慶門まで送れ
と仰言たべ。それより内には、一人入り侍らん。と申し給へば、證なき
事にこそ。と仰せらるれば、げに。とて、御手箱におかせ給へる刀申し
て立ち給ひぬ。今二所もにがむ、各おはしましぬ。
子四つと奏して、かく仰せられ議するほごに、丑にもなりにけん、
道隆は右衛門の陣より出でよ。道長は承明門より出でよ。とそれを
さへわかたせ給へば、しかおはしましあへるに、中關白殿陣まで念

すちなし
(一)道兼

じておはしたるに、宴の松原のほごに、その者ともなき聲ごもの聞
ゆるに、すちななくて歸り給ふ。粟田殿は露臺の外まで、わななくわな
なくおはしたるに、仁壽殿の東面の砌のほごに、簷ごひごしき人の
あるやうに見え給ひければ、ものも覺えて、身の候はばこそ仰言も
承らめ。とて、各立歸り参り給へば、御扇をたゝきて笑はせ給ふに、
入道殿はいと久しう見えさせ給はぬを、いかかと思し召すほごに
ぞ、いとさりげなく事にもあらずげにて、参らせ給へる。いかに、いか
に。と問はせ給へば、いこのごやかに、御刀に削られたるものを取具
して奉らせ給ふに、こは何ぞ。と仰せらるれば、たゞにて歸り参りて
はべらんは、證さぶらふまじきによりて、高御座の南表の柱のものを
を削り候なり。とつれなく申し給ふに、いとあさましう思し召さる。
こそ殿たちの御氣色は今にも直らで、この殿のかくて参り給へる
を帝より始め感じの、しられ給へど、羨ましきにや、又いかなるに

けざやか

か、物もいはでぞ候ひ給ひける。なほ疑はしく思し召されければ、つ
ごめて藏人して、削屑を遣はして見よ。ご仰言ありければ、もて行き
て、おしつけて見たうびけるに、つゆ違はざりけり。その削跡はいこ
けざやかにて侍るめり。末の世にも見る人は、なほあさましき事
ぞ申ししかし。

—大 鏡—

二二 法成寺の造營

今は御心地例ざまになりはてさせ給ひぬれば、御堂の事思し急
がせ給ふ。攝政殿、國々までさるべき公事をばさるものにて、まづこ
の御堂のこゝを先に仕うまつるべき仰言宣ふ。殿の御前も、この度
生きたるは別事ならず、我が願のかなふべきなめり。ご宣はせて、他
事なくたゞ御堂におはします。方四町をこめて大垣にして、瓦葺き
たり。さまざまに思しおきて急がせ給へば、夜の明くるも心もこな

(一)法成寺。寛仁三年道長の創建。址は今の京都御所の東隣。
(二)藤原頼通。道長の子。
(三)藤原道長。

大とのごもる

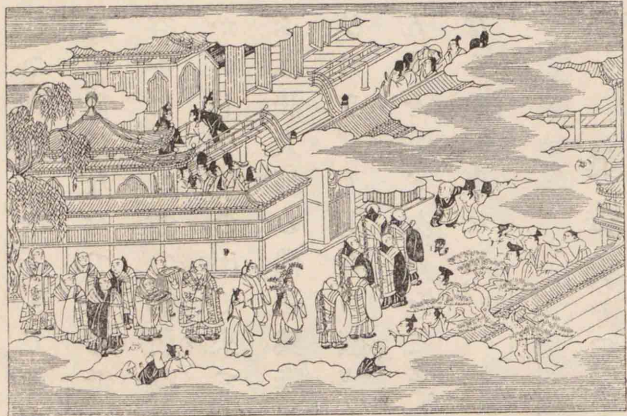


藤原の金色の佛を、數も知らず造りな
道め、そなたをば北南と馬道をあけ
長て、道をこゝのへ造らせ給ひて、廊
渡殿かず多く造らせ給ふに、鶏の

鳴くも久しく思され、宵曉の御行も怠らず、安き日も大とのごもら
ず、たゞこの御堂の事のみ深く御心にしませ給へり。
日々に多くの人々参りまかて立ちこむ。さるべき殿ばらをはじ
め奉りて、宮々の御封、御莊ごもより、一日に五六百人千人の夫ごも
を奉るにも、人の數多かるこゝをば、かしこきこゝに思したち、國々

地子官物

の守ごも、地子官物はおそなはれごも、たゞ今はこの御堂の夫役、材木、檜皮、瓦など多く参らすること、我もくゞ競ひ仕うまつる。大方近きも遠きも参りこみて、品々、方々、あたりくゞに仕うまつる。或所を見れば、御佛仕うまつること、佛師ごも百人ばかりなみゐて仕うまつる。同じくはこれこそめてたけれご見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、匠工ごも二三百人のぼりゐて、大きな木ごもには太き綱をつけて、聲を合はせて、えさまさご引上げさわぐ。御堂の内を見れば、佛の御座作りかゞやかす。板敷を見れば、木賊、椽の葉などして、四五十人手ごごに並みゐて磨き拭ふ。檜皮葺、壁塗、瓦作なども敷を盡したり。又年老いたる翁などの、三尺ばかりの石を、心に任せて切りご、のふるもあり。池を掘ること四五百人おりたち、山を疊むこと五六百人のぼりたち、又大路の方を見れば、力車にえもいはぬ大木ごもに綱をつけて、叫びの、しり引きもてのぼるあり。賀茂川の



法成寺の造營

方を見れば、筏ごいふものに樽材木を入れて、棹さして心地よげに諸ひの、しりてもてのぼるめり。大津梅津の心地するも、西は東ごいふ事はこれなりけりご見ゆ。磐石ごいふばかりの石を、はかなき筏にのせて率て來れご沈まず。すべていろくゞさまぐ、の言盡しまねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舎造りけんもかくやありけんご見ゆるを、冬の室、夏の風、各ここごごなり。

かゝる御勢にそへて、入道させ給ひて後は、いごご勝らせ給へりご見えさせ給ふにも、なほなべてならざりける御有様かなご、近う見奉る人は尊み、遠う見奉る人は、遙

かに拜み参らす。今はこの御堂のあたりの本草ともならんと思へる人のみ多かり。そなたさまに赴けば、海の浪もやはらかにたちて、この御堂の物をもて運ばせ、河も水澄みて、快くうかべもて参ると見ゆ。なほなべてこの世の事は見えさせ給はず。まづは、先年に長谷寺にある僧の御祈禱をいみじうして寝たりける夢に、大きにかめしき男の出で来て、何かかく殿の御事をばこもかくも申し給ふ。弘法大師の佛法興隆の爲にうまれ給へるなり。ごぞ見えさせ給ひける。又天王寺の聖徳太子の御日記には、王城より東に、佛法弘めん人を我ぞ知れ。ごこそは書置かせ給ふなれ。いづれにても、おろかならぬ御事なり。

— 榮華物語 —

眞善美 「自修文」

三宅雪嶺

文化生活の出發點は、眞善美を指して進まうと心掛けるところにある。眞

調諧均齊
相調和しやは
らぎ互にさ
このひひさし
いこと

要諦
大切なみち

善と美と三つ組を形作り、各獨立しながら相接觸して、よくこれを調諧均齊し、少しも矛盾せぬやうにするのが完全な生活である。

眞善美は果して完全な要諦であるか、いかにしてこれを證明するかといふに、これは人類が幾代もなく經驗を積み知識を練つて、おのづこ知りえたのであつて、今は誰でも熟知してゐる。眞善美といふ名稱は、ギリシヤ人の創唱だといふが、ギリシヤばかりが發明の榮譽を荷なふわけにはゆかぬ。同様なことはどこにもあるもので、言葉に現さぬにして、事實には現してゐる。日本の三種の神器は、特にこれに眞善美を配當したのではないが、自ら相當るところがある。即ち鏡は眞、劔は善、玉は美を現す。鏡がその物をありのまゝに映じ、眼を眼とし、耳を耳として、少しの間違をも許さぬのは眞を意味する。劔が、或は殺人劔といひ、或は活人劔といつて、悪人を除き善人を救ふのは善を意味する。玉が何等の必要もないやうで、しかも見て飽くことのないのは美を意味する。「何故にこの三つを並べるか、それは偶然に並んだのではないか。」と論ずる人もあらうが、かく解すべき事實のあることは否定されぬ。支那で智仁勇を達

達徳
とんな所にも
さうこほりな
く行はれる道

徳とし、日本で智を鏡に當て、仁を玉に當て、勇を劍に當てたことがある。普通に通に世間で眞善美を分けず、又これを意識せぬやうでも、一たび聞けば、何人もこれを了解するのは、人の頭腦がかう出來上つてゐるからである。

眞善美の語の起原は數千年前にある。そこで随分舊いものとして、今日これを差措いて顧ぬものが少くない。數千年間の歴史を見るに、概ねその一部だけを認めて、この三つを合はせて認めようと思せず、或は殊更に他の部分を排斥して止まぬ。今日文化の進歩が著しいとしても、眞と善と美が離れ勝になり、黨派的軋轢あつたともいふべき形がある。科學者は實驗に照らして眞實を知らうとし、他に何事があつても振返つて見ず、偶、振返れば輕蔑の目を以て見る。宗教家や道德家は、昔から善惡正邪と定まつたところから見て、過去の形式に當てはまらねば、人間扱あつかひにすべきでないやうに心得てゐる。藝術に従事するものは、眞といひ、善といひ、勝手に取極めたことであつて、身を窮屈にするよりも、美に憧あこがれ美的生活を送る方が生きがひがあるを稱する。これは時代により土地によつて相違があるけれど、古來幾度繰返されてゐるか知れぬ。繰返される中

Helen Keller.
アメリカの女流思想家(西暦一八八〇年)
瘋癲まぼろしの伍伴かまの氣かまがひのな
五感ごかんの視し、聽り、嗅か、味あじ、觸ふの五つの感じ。

に多少進歩はするものの、一部を固執して他を慮らねば、己自らを不具にする嫌がある。遺傳又は偶發で不具になることもあるが、多數は身體的にも、精神的にも、立派に發育する可能性を備へてゐる。それが周圍の事情で不具になり、恰も盲目と啞が互に相罵るやうな滑稽を演ずるのは、深く戒むべきことではないか。社會が進むとともに分業も亦進み、何でも専門に分れる以上、互に分れるのが進歩だと考へるのは、耳を破つて目の見えるやうにし、目を潰して耳の聞えるやうにしようとするのに似てゐる。聾で繪畫に長ずるのがあり、盲で音樂に長ずるものがあるけれど、それで畫家が聾にならねばならぬといふことはない、音樂家が盲にならねばならぬわけもない。ヘレン・ケラーが盲啞で人並以上能力があるからして、人々が盲啞にならうと思すれば、全く瘋癲まぼろしの伍伴に入る。眞善美が別々にあるべきものでないことは、五感の別々にあるべきでないと同様である。但し人によつて、三つが同じやうには備らず、厚薄の別のあるのは免れぬ。

眞善美を揃へて進むのは、文化生活に大切なことで、食物でも、衣服でも、

家屋でも、公共生活でも、成るべく三拍子揃はせたいものである。然らば食物に何の眞善美があるかといふに、生理的、衛生的に法則を守るのは眞を求めるのである。しかし、單にそれだけでは濟まぬ。肉食するにしても、動物を慘酷な方法で捕へまいとする、これは善を求めるのである。又食物は料理して美味を増すばかりでなく、體裁も餘り見苦しくはならぬ。これは美を求めるのである。そして眞は善美を助け、善は眞美を助け、美は眞善を助け、互に相助成するところがある。衣服や家屋についても同様である。堅實も質素も結構である。しかし、一概に華美を排斥すべきでない。たゞ堅實質素と撞着せぬ範圍に於てすべきである。

眞善美の一つだけ離して、他の二つを顧ぬのは、或點に得るところがあつても、要するに不具であることを免れぬ。この三つは調和を要する。その調和もさまでむづかしいことではない。かの英國のゼントルマンの生活は、正しく眞善美を心掛けるものといへる。彼等が世界紳士の模範と稱せられるのも偶然でない。

(一)近代の禪僧、京都相國寺の管長であつた。
 (二)佛敎で欲界の内外二院にあつて、内院は菩薩が成佛前に住む所の遊樂する所の内院をいふ。次は菩薩の位に達して、釋迦の位置に進んで佛となつたのである。
 一隻眼
 ひさかぢの目
 ひさかぢの見識の意に用ひ

(一)荻野獨園が弟子に謂つた、「釋迦は今正に兜率天^(二)で頻りに勉強して居られる。

我等は何として勉強せずに居られようぞ。」と。普通ならば、釋迦は理想に達し進歩を極めたところを、獨園は釋迦もまだ勉強して居るところとした。そこに一隻眼がある。長い間には進歩があり、停滯があり、退歩もあるが、大體に於て、人生は進歩を續け、いつまでも進歩の途にある。しかし、今は今で完全に近づくことが出来ぬでなく、眞善美を指して進む間、瞬間でも完全に近づきつつあると稱し得る。正しく、清く、麗しく、慈みのある生活を送らうと思ひ立つのが、文化生活に入る第一歩である。そして、いやが上にも充實し、完全に達し、圓滿に到らうと絶えず進むところに、人生の實相が現れる。眞善美を指して進めば、いつ死んでもそれだけ適當に生活し得たのである。

——文化生活——

一三一 現代の文學 その一 千葉 龜 雄

我が國現代文學の源流を求めようとするれば、どうしても明治二

(一) 本名長谷川辰之助。東京の年。明治二十年始め、口語體の寫實小説「うき雲」を出した。
 (二) 名は武太郎。東京の人。明治二十年前後、口語體の小説「夏木立」を出した。
 (三) 名は徳太郎。東京の人。明治二十年小説「色懺悔」を出した。
 (四) 名は林太郎。石見の人。明治二十三年小説「舞姫」を出した。
 (五) 名は成行。東京の人。明治二十二年始め、小説「露團」を出した。
 (六) 名は直人。長崎の人。明治二十二年小説「殘菊」を出した。

十一年から、明治二十二三年代までに遡らねばならぬ。二葉亭四迷、山田美妙、尾崎紅葉、森鷗外、幸田露伴、廣津柳浪の諸作家が始めて文壇に現れ、各特殊な個性と清新な色彩のある處女作を發表し、眞の文學とはいかなるものか、又來るべき日本文學はいかなる形式の下にあらねばならぬかを當代に示したのが、實にこの時代だからである。しかしてこれ等作家の制作の傾向は、大づかみに寫實主義と稱するべきものであつた。殊に紅葉、露伴の初期の作物は、井原西鶴あたりの寫實小説から専ら手法や技巧を學んだものであつたが、精神に於ては何等の影響をもそれから受けず、却つて歐洲文學の感化を含んだ跡が著しかつた。一つは坪内逍遙が、明治十八年に「小説神髓」を著して、藝術の本質を始めて理論的に闡明し、それによつて、今までとは全く違つた文學に對する新しい觀念を時代に與へて居た爲、又他の一つは、叙上の諸作家が歐洲文學に深い知識を

「殘菊」を出した。

持ち、かの文學の精神を、我が國の文壇に移すことに忠實な信念を持つてゐたからでもある。例へば、二葉亭四迷の露文學に於ける、森鷗外の獨逸文學に於ける、當時に於ける歐洲文壇の名花の移植は、實に二家の功によるこそが最も多い。なほその頃に於ける寫實主義の移植を始し、その後今日に至るまで、我が國文壇の諸主潮の流が、歐洲文壇のそれといつても起伏を同じくして居るのは、興味ある現象でなければならぬ。故に言葉を換へていへば、我が國文學の潮流は、明治二十一年代に於て、始めて世界文學の潮流に仲間入したものと雖、強ち誇張ではないであらう。さらば謂ふところの寫實主義とは何かとすれば、それはあるがまゝの相をたゞあるがまゝに認め、その實象を力めて忠實に寫し出すことである。度である。だから題材を奇抜なものに求めず、反つて普通にありふれた社會の事實を取扱ふ。例へば、紅葉が女性の種々相を寫し、性

情の自然な發展を寫すに力を集めた如きもそれである。かくして人間の心理や事物の様相を、出来るだけ微細に、寫し出す必要が起るごにも、その必要に伴はない文章體の文章が次第に小説から離れ、言文一致體が主としてその頃から採用せられて來たのは、もごより當然な趨勢でなければならぬ。

その間、明治女流作家の第一人者たる樋口一葉^(一)と、神秘小説の創意を拓いた泉鏡花^(二)が現れたが、寫實主義は明治三十年代を止りとして下り阪になり、小杉天外^(三)が佛國十九世紀後半の自然派の主張を採入れ、新寫實主義を唱へるに至つて、我が國文壇は始めて自然主義時代の前期に入つた。天外のいふところは、人生そのものに善悪美醜の定まつた本質がない。小説はたゞあるがまゝの實世間を、正直に丁寧^(四)に筆記すればよいといふのである。これを以前の寫實主義に比べれば、作者の主觀的な物の觀方を排して、たゞ嚴肅な技

(一)名は夏子。東京の人。明治二十八年始めて小説「江」を出した。

(二)名は鏡太郎。加賀の人。明治二十八年小説「夜行巡查」「外科室」等を出した。

(三)名は爲造。明治三十年「蛇いぢ」三十五年「はやり唄」を出した。

J'Emule

Zola.
(西曆一八四〇年—一九〇二年)
(明治三十五年作)

(四)英語ロマンチズム
(Romanticism)の宛字。

(五)Maupassant.

(西曆一八五〇年—一八九三年)
(Plaubert.
(西曆一八二〇年—一八八一年)
共に佛國の自然主義小説家。

師として忠實に人生を映寫すべきことを唱へたのがちがふところである。これは専ら佛國のエミール・ゾラ^(一)の傾向を學んだもので、永井荷風もまた「地獄の花」^(二)の一篇によつてそれに共鳴した。

思ふに歐洲に自然主義の發生した原因は、十九世紀後半に於ける自然科学の勃興による。即ち自然主義は、從來の浪漫主義理想主義に反抗したゞ實驗と分析によつて、人生から一定の法則を引出さうとするものである。故にごごまでも客觀を尊ぶけれどもゾラの自然主義の主張には、まだ幾分の不徹底があり、その作物も、また幾分か浪漫的な氣分を加味したやうに、天外、荷風の作物も、同時にその弊のあることを免れなかつた。然して田山花袋、島崎藤村が出るに及んで、始めて自然主義の世紀が完成した。後期自然主義といふべきはこの時代である。花袋は現實暴露、或は露骨な描寫といふ信條により、専らモーパッサン^(三)、フローベル^(四)の作風に法つた。即ちそ

(一)名は誠也。越後の人。論文集。自然主義の著がある。
 (二)名は瀧太郎。石見の人。早稲田大學教授。研究は文學の論文集。大正十七年歿。
 (三)名は美術。詩人、小説家、批評家。淡路の。大正十四年歿。

のいふところによれば、人生は官能で経験する外に、眞實なるものがない。しかも官能の前には、たゞ眞と偽とがあるだけで、善悪美醜といふものが有りえないから、随つて世間がたゞひごんなに醜悪と考へるものでも、それが眞實であるならば、冷靜にそれを忍がいて一向差支がないと。この主張は、藝術は必ず美を忍がくべきものだといふ既成の審美觀念を、根本から打碎いたもので、爲に自然主義といへば、必ず醜惡な人生相ばかりを寫すものだといふ常識からの批難を受けたのは、怪しむに足りない。しかし當時熱心に自然主義を支持し強調した批評家に、長谷川天溪、^(一)島村抱月、その他の人があり、又徳田秋聲、正宗白鳥、國木田獨步、岩野泡鳴等のこの派の有力な諸作家が、各特色に豊かな制作を盛に提出するやうになつて、自然主義の精彩ある展開は、殆どその頂點に達した。たゞ運命を人生に於ける不可抗力であるとし、人生のいかなる努力も悉く無効

だと思はれる運命主義の信仰だけは、獨り秋聲、白鳥、獨歩のみにあつて、花袋、藤村の曾て示さなかつた自然主義の一面であつたが、かく初から人生の努力を否定し、反抗の無力を肯定するが故に、彼等の作物は、すべて絶望的、虚無的であり、光を缺き、感激を失ひ、苦澁にして灰白な色彩に満ちた。

たゞ一人この滔々たる大勢の外に超逸し、最後まで自分の個性を護り通して、異彩ある作物を多産した作家に夏目漱石がある。漱石の才能は多角多様で、内容によつて様式を自由に變化して行く爲に、容易に一つの主義をもつて彼を掩ふことが出来ない。たゞ彼はいかなる傾向を擇ぶにしても、悉く自然主義の行き方と違ひ、或は正反した。恐らく彼の最も優れた傾向は、英國派心理小説の脈絡をひいた作物にあるであらうが、何にせよ、その明色と倫理的意識と、東洋趣味的の冲澹とは、相俟つて自然主義の暗色から救はれよ

うと欲する讀者に、多大な慰安を與へる力が籠つてゐたことは争はれない。

一三三 現代の文學 その二

自然主義の衰潮は、ちやうど大正初期に於て著しく目立つて來た。この時、あたかも歐洲に於ても、自然主義は末期に迫つた。そして人生の些事や、機械的な運命觀のみに停滯して居る自然主義に反抗して、人間の生命力を高調する現實主義の叫が到る所に聞えて來た。我が國でその現象を啓蒙的に説述した厨川白村の「近代文學十講」が、忽ち數十版を重ねたことによつても、當時の我が讀書界が、いかに新しい轉廻を文壇に望んでゐたかは、大凡知りえられるであらう。

けれども、たゞひわが國の自然主義全盛期にあつても、それと色

(一) ポーの短篇小説集を「神秘と想像の物語」といふ。
(二) Bachelard、佛國の詩人の詩集「惡の花」の作者。(西曆一八二一年—一八六七年)

(三) 雜誌「白樺」に據る一派の名

の異なつた藝術が全く影を隠したといふわけではなかつた。例へば、谷崎潤一郎の如き、日本人に珍しい異常感覺の追求によつて、新に耽美派の一面を拓いた。彼はポーの神秘と、^(一)ポードレルの頽廢味を一つにした作家だといはれ、浪漫的色彩を最も明らかにした。けれども當時の文學思潮の傾向から見、正面から自然主義に對抗し、また來るべき時代思想の一面を暗示したものは、^(二)どうしても明治四十三年に於ける白樺派の擡頭に指を屈しなければならぬ。白樺派は貴族の生まれである武者小路實篤を盟主として、志賀直哉、有島武郎等の學習院出身者を中心とし、人道愛と個性生命力の光明を高調しようとした新理想主義の一團である。人生に對する態度は、^(三)どこまでも肯定であり、積極であり、人類の將來は、一に人類内部生命の飛躍によつて、限らない幸福に仕向け得るといふのが彼等の信念である。蓋しかゝる藝術思想が生まれて來たのは、大正初

- (1) Dostyevskiy. (西曆一八二一年) 印度の詩人。論集「生の實現」詩集「ギタンジリ」の著者。(西曆一八六一年)
- (2) Tolstoy. 英國の小説家。戯曲家。ジャフの著者。(西曆一八六六年)
- (3) Roman. 英國の思想家。文明の原因を救済の著者。(西曆一八四四年)
- (4) Bucken. ドイツの哲學者。(西曆一八四六年)
- (5) Bergson. 英國の哲學者。創造的進化的の著者。(西曆一八五九年)
- (6) Realism.

期に於ける當時の哲學及び外國文學の感化によることが最も多かつた。何故ならば、明治末期から大正初期に於て著しい壓力をもつて思潮界に歓迎せられたものは、露國のトルストイ⁽¹⁾ドストエフスキーの論策主義、作物であり、更に印度のタゴール、佛のロマン・ローラン、英のカーペンター⁽²⁾ラッセル等の思潮が雜然として流れ入り、それを補ふに獨のオイケン、佛のベルグソンの新哲學を以てした。要するにそれ等の思潮は、飽くまでも人間心靈の勝利を基調とし、創造的進化の新生活を謳歌することに於て、いかなる點からも、自然主義のこの上の生存を可能にするものではなかつた。新理想主義が一方に崛起するにも、自然主義派に取つて代つた純藝術派の諸新人は、皆現實主義の使徒であつた。ここでもまた我が文壇は、その行き方が歐洲のそれに一致する。たゞ寫實主義も現實主義も、同じくリアリズムの名で呼ばれるけれども、その二

つは全く違ふ。寫實主義は主觀を頭から抜きにして、専ら外面から物象をゑがかうとするのであるが、現實主義は觀照に於ては出来るだけ科學的の精確を尊ぶに拘らず、批判と省察とは、飽くまでも嚴肅な主觀に於てしようといふもので、我が國文壇に於ける現代大多數の作家は、多くか少くかこの主義に依りつゝあるものと見られる。菊池寛、芥川龍之介が冷酷な諷刺によつて人間心理と現實人生相の矛盾を暴き出し、里見弴⁽³⁾志賀直哉が精巧な技巧をもつて如實の藝術自然を創造する如き、その他の作家いづれもそれ／＼の個性によつて作物を生産して居るが、概して文壇の中心は現實主義を出ない。しかもこれ等の諸作家によつて築かれた現實主義の藝術は、今や新しく進出して來た多數の新作作家によつて、漸く第二期の轉廻を見ようとして居る。一は、描寫する技巧が前代の作家に比べて、目覺めるほど纖巧であり、微妙であり、神經が清新である

(7) Bergson. 英國の哲學者。創造的進化的の著者。(西曆一八五九年)

(Conte,
小話、短篇)

事である。二は、題材のつかみ方が驚くべきほど奇警で、垢が抜け、氣が利いて居ることである。この點に於て、彼等の新傾向は殆ど佛國文藝の精粹たるコントの域に迫るものがあるといはれる。

次に現代の我が文學に注意すべきものは、社會改造の主潮といはるべき社會的意識を含んだ藝術傾向が新に出現した事である。即ち一九一四年の世界大戰は、その終結によつて、無數の新思想と新しい社會鬭争を惹起したが、中にも産業組織の研究から起つた無産階級の自覺が、その思想の表現を藝術に求めようとして、謂ふところの無産階級の藝術といふものを生んだ。それは我が國にあつては、大正十二年上半期に於て最盛を極めたのであるが、たゞ徒に思想宣傳の熱意だけが強く、藝術的情感が稀薄であるといふのが一般の不滿であつた。それがいかに大成するか否かは、たゞ將來に期する外はないが、たゞこの無産階級藝術が唱へ出されたの

を機會として、現代に行はれる我が一般文學が、社會意識と時代觀念を含むことの乏しいことを指摘し、その點に於て既成藝術局面の新しい轉廻を要求する聲の高いことは、注意されねばならぬ。

凡そ斯の如きものが、現時に於ける我が國文壇の大勢であるが、更に一二の附記すべきものがあらば、その一つは、明治末期に於ける坪内逍遙の文藝協會、小山内薫等の自由劇場その他演劇に於ける實際的の啓蒙運動に源を發して、特にこの二三年間に於て、劇に對する興味が著しく我が全文壇の中心となり、戯曲の制作に筆を着ける作家が多くなつたことである。そしてこの趨勢は恐らく一年と熱烈になつて行くであらう。これもまた歐米文壇の傾向を等しくするもので、たゞ我が國にあつては、その趨勢が遅れて來た爲に、一つは新脚本の上場が容易でない爲に、小説ほどの成長を見ることが出来ないが、すでにこの方面にも幾人かの優秀な作家を

出し、その作品には、我が國劇文學の先驅として、觀賞すべきものが決して少くない。

次に歐米文學の反譯の盛な現状も、また藝術界一般の要求を示すものでなければならぬ。印刷術の隆昌は、世界いかなる國の文學をも自由に移植せしめ、我が國民をして坐らにして世界藝術圖書館の廻廊に立つ感あらしめる。我が文壇がその精を抜き粹を選んで、新しい日本文學を創造し得るのは、果していつの日であらうか。何にせよ、日本文學が世界藝術の一つの光となり、更にその光が反射して、我が國民の藝術的觀念を優れて高いものにするには、何よりも望ましいことである。

帝國新讀本 卷十終

附 録

俳 句 百 吟

元日や家にゆづりの太刀佩かん
年玉や利かぬ藥の醫三代
思ひ出て藥湯立つる餘寒かな
梅の花赤いは赤いは赤いはな
彼岸前寒さも一夜二夜かな
のどかさ無沙汰の神社廻りけり
鉢叩來ぬ夜さなれば朧なり
四方より花吹入れて鴈の湖
無性さやかき起されし春の雨
物種の袋ぬらしつ春の雨

去 來 去 來 去 來 去 來 去 來 去 來
燕 芭 去 太 路 惟 召 太 去
村 蕉 來 祇 通 然 波 祇 來

醫三代 藥は利かぬが
三代のついでに
古馴染の醫者
がもの堅つてく
る禮にやつてく

鉢叩 鉢叩 空也念佛の乞
食僧 瓢箪を
叩き經文を誦
して歩く。冬
の夜のもの。
(一)琵琶湖のこ

物種 草花の種子。

出代
雇人の年期が
みちて交代す
ること

朝朗御所の空なる揚雲雀
春の夜にたふさき御所を守る身かな
出代や幼ごころに物あはれ
やぶ入の寝るや一人の親の側
内裏雛人形天皇の御宇こかや
動くとも見えて畑打つ男かな
暮れてこす草山一つ春の月
絲遊のみだれくして静かなり
日は日くれよ夜は夜明けよと鳴く蛙
鳴く猫に赤ン目をして手鞠かな
紫に夜は明けかゝる春の海
春潮や海老はね上る岩の上
夕汐や柳がくれに魚分つ
人こひし灯さもし頃を櫻ちる

紫 影 蕪 村 雪 祇 蕉 來 琴 更 村 茶 董 子 雄
白 虚 几 一 蕪 闌 素 去 芭 太 嵐 蕪 紫
白 虚 几 一 蕪 闌 素 去 芭 太 嵐 蕪 紫

草臥れて宿かる頃や藤の花
ぬれ縁に齋こぼるゝ土ながら
春の泊鯛よぶ聲や濱のかた
行く春を近江の人と惜しみけり
五月雨の雲吹落せ大井川
蛸壺やはかなき夢を夏の月
暑き日を海に入れたり最上川
目のはてに帆一つ白し青嵐
文もなく口上もなし粽五把
蚊遣木にたましく沈の匂かな
夕立や家をめぐりて家鴨なく
野を横に馬牽き向けよほごごぎす
うき我を淋しがらせよ閑古鳥
鮎くれて寄らですぎゆく夜半の門

芭 嵐 几 其 芭 蕪 村 雪 明
芭 嵐 几 其 芭 蕪 村 雪 明
芭 嵐 几 其 芭 蕪 村 雪 明

(一)「秋來ぬさ目
見はさやかに
風の音にぞお
る。」(藤原敏
行)

草の葉を落つるより飛ぶ螢かな
蟬涼し水踏んで來た藁草履
雨折々思ふことなき早苗かな
あらたふと青葉若葉の日の光
まづたのむ椎の木もあり夏木立
晒布幾夜涼しき月を印す
絶えくゞに温泉の古路や苔の花
渡りかけて藻の花のぞく流かな
夕暮や野に聲のこる麥の秋
湖を前に關所の秋早し
秋立つや雲は流れて風見ゆる
秋來ぬと合點させたる嚏かな
がつくりとぬけ初むる齒や秋の風
川上の水靜かなる花野かな

芭蕉 紅葉 芭蕉
東洋城 蓼太 凡兆 楚秋 湫石 樽良 蕪村 杉風 碧梧 桐

胡瓜食うて青きからだやさりぎりす
やがて見よ棒くらはせん蕎麥の花
新月に蕎麥うつ草の庵かな
欠して月ほめてゐる隣かな
雨霽れて芙蓉に夕日露光る
名月や門にさし來る潮がしら
名月や疊の上に松のかげ
古疊つめたき秋の晝寢かな
名月や烟這ひゆく水のうへ
名月をこつてくれると泣く兒かな
三井寺の門たゝかばやけふの月
鯛は花は見ぬ里もありけふの月
更けゆくや水田の上の天の川
山越や馬も夜寒の胴ぶるひ

井泉水 宗因 几董 繞石 芭蕉 其角 四方太 嵐雪 一茶 芭蕉 西鶴 鳴雪

星月夜空の廣さよ大ききよ
霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き
初潮に追はれてのぼる小魚かな
枕上秋の夜を守る刀かな
粗穀の白を舞出る野分かな
荒れくゝて末は海行く野分かな
雨快し秋草の灯になじむ
薪もならず朽ちぬる案山子かな
雁金の竿になる時なほ淋し
牛叱る聲に鳴立つ夕かな
はぜ釣るや水村山郭酒旗の風
峰の線さやかに赤城秋晴れたり
波の間や小貝に交る萩の塵
送られつ送りつ果は木曾の秋

尙 芭 蕪 句 猿 瓊 正 去 支 嵐 乙 芭
白 蕉 村 佛 雖 音 秀 來 考 雪 字 蕉

枯枝に鴉のこまりけり秋の暮
塵塚に朝顔咲きぬ暮の秋
初時雨猿も小蓑をほしげなり
禪寺の松の落葉や神無月
雑魚に交る小蝦髯振る雲かな
寒月や我ひこり行く橋の音
冬の日やつれなく残る蓮の莖
里人の渡り候か橋の霜
下京や雪つむ上の夜の雨
君火たけよきもの見せん雪丸げ
馬ほくく我を繪に見る枯野かな
鳥飛んで荷馬驚く枯野かな
息杖に石の火を見る枯野かな
水鳥や向ふの岸へつうい

太 芭 其 癡 太 青 宗 凡 芭 子 蕉 惟
祇 蕉 角 醉 祇 々 因 兆 蕉 視 然

からびたる三井の仁王や冬木立
 我が寝たを首上げて見る寒さかな
 埋火や壁には客の影法師
 住みつかぬ旅の心や置炬燵
 炭團法師火桶の穴より窺ひけり
 ふる里は臍の緒に泣く年の暮

其 來 芭 燕
 角 山 蕉 村
 芭 蕉

帝國新讀本卷十附錄終

大正十三年十一月三日印
 大正十三年十一月六日發
 大正十四年二月十二日訂正再版印刷
 大正十四年二月十四日訂正再版發行

(帝國新讀本)

定 價	
自卷一	金四拾八錢
卷四	金四拾參錢
卷五	金四拾貳錢
卷六	金四拾貳錢
卷八	金參拾七錢
卷九	金參拾七錢

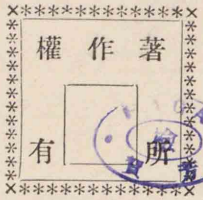
大 度	
自卷一	金八拾二錢
卷四	金七拾三錢
卷五	金七拾三錢
卷六	金七拾一錢
卷八	金六拾三錢
卷九	金六拾三錢

編 者 芳 賀 矢 一

發 行 者 兼 印 刷 者
 合資 會社 富 山 房

代 表 者
 合資 會社 富 山 房 社 長
 坂 本 嘉 治 馬

印 刷 所
 東京市小石川區音羽町六丁目
 富 山 房 印 刷 工 場



發 行 所

東京神田區通
神保町九番地

合資 會社

富 山 房

電話 大手六三七〇、七〇一三番
 振替 東京五〇一三番

卷之四

翰林院

編修

纂修

直學士

庶吉士

編修

纂修

直學士

大清乾隆二十二年
本朝乾隆二十二年
本朝乾隆二十二年
本朝乾隆二十二年

翰林院
編修
纂修
直學士

庶吉士
編修
纂修
直學士

文庫

25

898

広島大学図書

2000066898

